
烏と梔子。

森永パピ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

烏と梔子。

【Nコード】

N6104Y

【作者名】

森永パピ子

【あらすじ】

どこか遠い世界の話。戦争が終わり、三十年が経とうとしているが、水面下ではいまだ流血の争いが続いている。暗殺部隊に所属する男が思いを寄せるのは花屋で働く少女。最期の任務前の二週間、彼は彼女と過ごす為に強引な手段をとる。真摯な男に彼女も惹かれていくが……。

烏

おれに名前はありません。

おれ、親の顔は知りません。

わかりにくいですか？ すいません。

実は。

おれの生業は殺しなんです。

え？ 笑いますか。そうですか。そうですね。だって、おれたち同じ立場なんでもんね。

首切れてますよ。

あなたの首から下は後ろにあります。

意外でしたか。油断しちゃ駄目ですよ。

おれのような優男が。意外ですか？

虫も殺さないような顔ですか。

いや、蚊とかよく殺しますよ。夏に。

って、もう聞こえませんか。そうですね。

こんなに暗い森の中です。今夜はお月様も出ていませんね。

凍える夜ですね。すこし話したい気分なんです。

すこしお付き合いくださいませんか。

初めて仕事をしたのは十二歳でした。

おれ、これでもいわゆるエリートってヤツです。

英才教育を受けたんです。

二親も親戚もいなくなった戦災孤児から選ばれたんですよ。気づけばもう二十七です。

この国に産まれて、生きる意味は人殺しなんです。

でも、特殊な職種ですけどね、これでも国家公務員なんですよ。普段はどこにでもいる独身男です。自炊がめんどくさい時はさと定食屋に行きます。夏はなるべく、仕事が入ってなければ、毎日洗濯しますけど、冬は二、三日に一度ですね。家事は結構やるほうですよ。料理もね、包丁捌きはその辺の板さんより上手いですよ。嫁さんが家事下手でも大丈夫です。

でもね、仕事柄おれのような男が、嫁さんとか、あったかい家庭とか、無理じゃないですか。

刃物が身体に刺されると、すごい冷たいって知ってますが、すごく寒いんですよ。

おれの心の中、っていうんですか。いつもそんな感じです。標的がどんな目に遭っていても、なんにも思わないんです。

これが普通だったんですよ。当たり前だったんです。言わずもがなですよ。

でも、困ったことに、それはちょっと違うんだなって最近、なんとなく思うようになったんです。

でも、言っておきますがおれは、この仕事に不満なんてないですよ。

誰かがやらなければならぬことなんです。戦争はまだ終わっていませんからね。

だって、あなたもそうでしょう。あなたの死は無駄ではありません。あなたはご自分の国を、残してきた家族を守る為にここに来て、おれと戦って、運悪く命を落とした。だけど、あなたが落としたのは、命だけではなく、次世代への礎なんですから。

できれば、憎しみが無いようにしていきたいとは思っているんですけど、ほら、おれたちって殺すか殺されるかじゃないですか。こんな甘いこと言ってる場合じゃないですけど、もし、おれたちの子供達がこれじゃいけないんだって互いの手を取り合ってくれたら、

本当に素晴らしいことですよね。そうして本当の和平が得られるのであれば、おれ、忘れられてもいいんです。もともと、おれたちの存在って公にされていいんですから。公にされない職業でよかったですね。本当。おれそう思っています。

これ、誰にもいってないトップシークレットなんですけど、実はおれ、一人の女性がとっても気になっているんです。

おれ、国の一番大きな都市に住んでいるんですけど、首都って言った方がわかりやすいですね。あなたも知っているでしょう。あそこです。あそこは同じように戦争で親や親類を亡くした人たちがけっこう多いんですけど、みんな復興も進んで前向きで活気があつてなかなか賑やかでしょ？ 道端には楽器を持って演奏してくれる人もいるし、ずいぶん市場も充実しているし。その市場の近くに花屋があるんです。慰霊碑に献花しに行くでしょう。おかみさんとは顔なじみなんですけど、最近そこに女の子が働いているんです。もうおわかりでしょう？ おれ、その子のことがきになっているんです。とっても笑顔が素敵な子なんですよ。血で汚れた服が気になって、洗濯しても、新しい支給服を着てっちゃうくらい、その花屋に行く時は気合入れちゃうんですよ。滑稽ですよ。自分でも思います。

「先輩。なに首相手に笑っているんですか。死者に失礼ですよ」

「なんだセカンドか。任務中に先輩って言っちゃダメでしょ」

「すみません、……隊長。任務完了しました。撤収のご命令を」

「うん。じゃあ、帰ろうか。皆は？」

「全員、とりあえず生きてます。重傷を負ったのは、ファイヴ、セブン、以上二名。すでに救護班により搬送されました」

「そっか。頑張らせすぎだね。セカンドは大丈夫？」

「ご覧の通りです」

短い黒髪に黒い眼。細身だが筋肉質な体躯。殺気が失せると好青年としか形容しようのない彼は、上司に軽く微笑んで見せた。

四つ歳下の彼は本が好きで、様々な分野の書物を所有している。任務のない時は国立図書館に入り浸り、副業として職員も勤めている。気になる書物があれば書棚整理の仕事も忘れ没頭してしまうのが悪い癖だが、礼儀正しく柔和な物腰の彼を非難するものはいない。暗殺部隊の職員は皆副業を持つている。しかし隊長である彼はそれを許されていない。任務がない日は身体を休めるか鍛えるかあるいは作戦会議に出席している。隊長に任命される前に一度小学校の教諭に志願したが、受理されることはなかった。そのかわり暗殺部隊の精鋭たちが慰安隊に産んでもらった子供達の鍛錬を担当させられた。

一定の能力を認められた隊員たちは避妊具をつけずに慰安隊とまぐわうことが許される。懐妊した女達はそこで部隊から外され子育てに専念する。その後は国から住まいと援助金を支給される。シングルマザーも珍しくなく、彼女たちの為のコミュニティーがあり、国からの名誉勲章を授けられるため誹謗の的になることはない。

慰安隊員たちは相手を選ぶ権利があり、いくら他の男達が望んでも身体を許す必要はない。そうして生まれた子供達は三歳になると適性検査を受け次世代の暗殺隊員として教育される。

不適切な場合でも記憶を消去され一般市民としての生活を送ることになるだけだ。そして多くの母親たちはそれを望んでいる。暗殺部隊になる子供たちは五歳になると親元を離され、訓練校に入学させられる。訓練校に入ると全寮制ではあるが最低限の自由と長期休暇が許され、小遣いにしては高額な給料も支給される。そして十二歳になると最終試験と尋問が行われ、最終判断は本人に任される。しかし実際ここまで残る子供達は当初の十分の一まで減少する。

太い枝を足場に森を抜ける。特殊な素材で出来た靴は物音一つ立てさせない。

このまま無事、国にたどり着けば彼らには二週間の休暇が与えられる。国境にたどり着くまで一切気は抜けない。聳え立つ鉄門をく

ぐるまで誰一人として声を発するものはいなかった。

梔子 一日目

朝夕の身を刺す寒さが嘘のように、日中の陽射しは暖かい。物陰に入ればやはり風は冷たいが、陽が当たる場所では冬を忘れる暖かさだ。

蛇口からでる水は骨の芯から痺れるほど冷たいが、使えるだけ有り難い。花筒の水を入れ替え、傷みはじめたものを抜いていく。ミニブーケにしてディスプレイにしたり客にオマケと言ってプレゼントすると喜んでもらえる。売り物としては駄目でも、人を喜ばせられる花を誇らしく思う。

赤いマーガレットとピンクのバラで小さなブーケを作っている彼女の名前はマシロ。あと二週間で十八になる。元国家公務慰安隊員の母親と二人で暮らしており、父親は戦死したと聞いている。マシロの住む界限では周りの子供達も同じように母子家庭が多く、皆で助け合って生きてきた。

十二歳の時に国から通達が届き母親に役所へ連れられた。近寄りがたい難しい顔をした制服の大人たちは書類と彼女を見比べながら、簡潔に十八歳になったら慰安隊に入隊することができると入るか入らないかは本人の希望に任せると云った。小さな頃からそれとなく母親に教えられてきたことだったのでマシロはその場で承諾した。破瓜の儀式は相手を選ぶことが許されているし、最も重要な任務の伽も選択権がある。何より国のために働いている隊員たちの役に立てるものならいいと信じていたからだった。

慰安隊の任務内容の殆どが隊員たちの身の回りの雑用で、その中で好意を持った相手と寝所を共にすることになる。母親の話によると中には一人で三人の慰安隊を相手にしなければならない者もいたらしい。マシロの父親は三年間の任務の中で数十人の慰安隊と子を成したが、最期の六ヶ月だけは母親とだけ過ごしたのだという。慰

安隊を拒むことは特級階の隊員だけに許された最後の恩赦だということも聞かされた。一部の元慰安隊に陰湿な嫌がらせを受けたことがあったのはそのせいだったのかと思った。

しかし、最近マシロには十二歳の選択を鈍らせる相手が出来た。

向いの魚屋の息子で小学校の教員をしているトビヲだ。トビヲは容姿こそ凡庸だが、いつも子供達に囲まれ向日葵のような明るい笑顔で接している。花屋の朝もちろん早い。出勤時のトビヲはマシロを見かけると同様の笑顔で挨拶をしてくれる。学校の行事で花が必要な時はトビヲが出向いて注文してくれたりもする。マシロも帰りにその魚屋で夕飯の買い物をし、運がよければ彼が店先にいることもあった。今日は小学校の社会科見学で工業地帯にいつているらしい。早朝の出勤時にトビヲが今日の社会科見学が楽しみで昨夜はなかなか寝付けなかったのだと照れ笑いを浮かべて話してくれた。彼の笑顔を見ると胸が熱くなった。言葉をかわすのは少しの緊張を催したが、男にしては柔らかい声がとても心地いい。

今朝の短い逢瀬を思い返していると手が止まっていた。目を閉じていたせいか、すぐ傍に人がいるのにも気づかなかった。

「こんにちは」

低くかすれたような声で、長身の男が軽い会釈をした。

「こ、こんにちは。すみません。ボーっとしていました。今日もいつもの花束でいいですか」

「はい」

不定期にだが、月に数回訪れる常連だった。マシロと名づけられた自分よりも色素の薄い肌。長めの髪の毛は銀色で左目に眼帯をしている。額から右斜めに顎まで走った傷跡を差し引いても端正な顔立ちをしているが、唯一見ることでできる赤茶色の右目はいつも眠そうな重い瞼で、生気が感じられない。

彼は国から支給されるタートルネックのニットタイプの特殊服を着ている。おそらく穿いているものも同様のものだろう。一般人風

だが、間違いなく特殊部隊員だ。一枚だけ残っていた写真の中の父親も、形は違えど同じタイプの服を着ていた。母親も同じ物を持っているので知っている。一見ブランドロゴに見える胸に刺繍された獅子のマークがその証拠だ。

しかし、彼はいつもここで白い花を買っていく。街から外れたところにある慰霊碑に献花しているのだとおかみさんから聞いていた。悪い人ではなさそうだけど。マシロはちらりと男をみた。目が合い、無感情に逸らされた。マシロはこの異様な風貌の男が苦手だった。

「あの慰霊碑にですか」

接客だと言い聞かせながらマシロは思い切って話しかける。

「はい。あそこには両親が眠っています」

「そうですか。私の父はその先の丘の上にあります。戦争で活躍したらしいです」

そういうと男の表情が一瞬揺らいだように見えた。真つ白な百合と八重先の雪洞菊をふんだんに重ね包装紙に包む。男は作業中ずつとマシロの手を見つめていたが、ふと声を発した。

「あの奥にあるのは、梶子ですか」

「あ、はい。珍しいでしょう。品種改良されたものらしくて昨日入荷したんです。こんな寒い時期に花が可哀想、あ。今のおかみさんには内緒ですよ。売り子なのにこんなこと言ったのばれたら怒られちゃいますから。でも、きれいな花ですよ。香りもとってもいいし、私も梶子好きなんです。花言葉が私はとても幸せとか、優雅とか洗練とか、清潔とか、あ、喜びを運ぶって言うのもあります！よかったらお一ついかがですか？ 幸せを運んでもらえるかも！なーんちゃって」

マシロはにこにこ笑いながら、男を見上げる。

「じゃあ、あれもください」

「へっ？ あ、ごめんなさい！ 押し売りじゃないですよ！？ ちよっと冗談のつもりで」

あたふたと男に向けて両手を振る。男は幽かに笑った。よく見て

いなければわからないほどの微笑みだったが、たしかに見えた。一番最初の雪の一片のように消えていった。

「いいんです。あれ、ください。そして贈り物用に包んでください」
静かな、揺るぎない低音にマシロは頷かざるを得ない。どうい
色の包み紙がいいか尋ねると、おまかせしますと返ってきた。

マシロはちよつと考えて暖かいオレンジと黄色のふわりとした紙
で鉢を包み、濃いオレンジのリボンをつけた。寒々しい鉢に陽だま
りのような明るさを添えてやりたかった。

「いかがですか？ あ。メッセージカードお付けします？」
「いいえ。名前がわからないので結構です」

妙な答えに疑問を抱いたが、特に気に留めないようにして手に取
ったメッセージカードを作業台においた。

「はい。わかりました。ではお会計が七千五百還になります」

男は会計を済ませると、白い花束と暖色系の鉢を両手に抱え、じ
っとしていた。

白い花束だけを見ると雪の使者のように儚げに見える。隣の鉢を
見ると少しはその寂しげな佇まいが柔らくなった。

マシロの男に対する苦手意識は薄れ、これからはもう少しちゃん
と接客しなきゃと反省した。

しかし、彼は動く気配がない。首を傾げてみせると、鉢植えが目
の前に差し出された。

「え。あの、お気に召しませんでしたか？」

無言で突っ返すなんて。少々腹立たしさと不安を覚えて男の右目
を見た。

「……あなたに……、その、幸運が訪れるように。どうぞ」

男はそっぽを向く。マシロは一瞬何を言われているのかわからな
くなったが、顔が赤くなるのがわかった。驚きのあまり心臓が活発
に動き出す。

「え？ わ、私に、ですか？」

「……ご迷惑でしたら、また元の位置に戻して置いてください。そ

れでは」

ぐいつと手元に押し付けられ、否応なしに受け取る形になった。男はすでに背を向け店の外に出て行った。とにかく鉢を台の上に置いて、まだ作りかけだった赤いブーケを手にとった。急いでピンク色の紙を巻き、ボルドーのリボンを巻く。

「ちよつと待つてください！」

店頭に飛び出して叫ぶと、男は人ごみに消えそうなほど離れたところ にいたがマシロの声にちゃんと反応して振り向いていた。男の許にかけより小さなブーケを差し出す。

「これ、もう売り物にはならないんですが、貰ってください」

男は瞠目して小さなブーケとマシロを見下ろす。

「い、いっぱい花をお買い上げいただいたので、サービスです」

何をしているのかと恥ずかしくなつて適当な言い訳をしたが、まともに男を見ることができない。

「……赤は、苦手なんです」

小さく呟いて、そつとブーケに手を伸ばして、指先で花びらにふれる。

「あ、そ、そうですか……。すみません」

気まずく思いながらブーケを引つ込めようとすると、手ごと握られた。

「でも、あなたがくれるなら嬉しいです。あなたに贈ったはずの梔子なの に、おれにも喜びを運んでくれた」

するりとブーケを受け取り、鼻の近くに寄せた。

「ありがとうございます」

なにが起こっているのか理解できないと言わんばかりに硬直しているマシロを置いて男は再び歩き出した。

「……な、なに、今の。キザ、へ、変な人。なんなの？」

どくどくと胸を打つ心音を誤魔化すように小さな声で悪態をついた。彼の手は、水仕事をしていた自分よりも冷たかった。赤とピンクの花を手にとるとやけに映えた。

「ちゃんと防寒すればいいのに」

体温が上昇したせいか北風が身に染みる。先ほど見たすこし丸まった男の背中が脳裏に過った。

「あー、いけない。店番店番！」

振り払うように頭を振り、小走りで店に戻った。

作業台の上の暖かそうな包装紙をまとった梶子を抱える。三千還もする決して安くない代物だ。

「せっかく貰ったんだもの。大事にしくちや」

生まれて初めて自分に贈られた花。贈る人ばかりを見てきたが、いざ贈られると素直に嬉しかった。

赤は苦手だと言っていたが、受け取ってくれた彼も同じ気持ちなのだろうかと思うと、さらに気持ち弾んだ。次に来てくれた時はちゃんとお礼を言わなくちや。鉢を抱いて小さく笑った。

烏 一日目

帰国して任務完了の報告に向った官長室で早々に二週間後の任務の説明をされた。敵対国の国防長官の暗殺。期間は三年。五人一組が一部隊として派遣する潜伏任務で、六部隊の人員構成がすでに任命されていた。残りの五部隊は、万が一、初期投入部隊が全滅した場合のための補充部隊だった。

各部隊には精鋭が二名、中級隊員が三名選ばれており、セカンド呼んだ青年と再び同じ部隊だった。

彼は余計な犠牲を出さないようにと自分の部隊を初期投入部隊に願いだしたが、長官は承諾を渋った。

彼は世界最高の戦闘力を持ち、また破魔眼の持ち主だ。眼帯は破魔眼抑制装置の役割を担ってる。

破魔眼には、見たものの殺気や恐怖を具体的なイメージとしてみせる幻覚術と金縛り、あるいは破魔眼を持つものの想像を具現化して死に至らしめる力がある。催眠術を発生させる能力であることは最近わかってきたがそれ以上の解明には追いついていない。この術を発動させるには膨大な精神力と体力を消費するので使いすぎると死に至る可能性があるらしい。訓練中に二度死にかけた。

最終手段として使用する為、必然的に彼は体術や火器砲術など様々な訓練を受けている。幼い頃には破魔眼の能力をコントロールする方法として化学療法も受けていた。そのほか、様々な耐毒性をつけるための訓練も重なり、副作用により色素が人よりも薄れていた。繁殖力も通常より随分劣っており、精通して以来何人も女と性行為を行ってきたが未だ子を成していない。

上層部や部隊ではそのままハマやアカメと呼ばれているが戦災孤児のため本名がない。両親は不明で生き残っている可能性はゼロに等しい。

アカメが条件を飲まなければ出勤しないという長官は渋々承諾

印を押した。

最後の二週間になるかもしれないと思った彼は花屋に通おうと考えた。

少しだけでいい。彼女の記憶に自分の存在が残れば、今回の任務で死んでも悔いはない。

たとえ、彼女が他の男に思いを寄せていても構わなかった。彼女がその相手と平和な国で家庭を築き、家族と笑っている。想像すると冷え切った胸の中がじんわりと暖かくなった。あの笑顔が消えないように、そしてあの笑顔と同じような顔でこの国の子供達が笑うのなら、どんなに素敵だろうかと思う。

自然と緩んでしまう顔のまま防衛庁館内の廊下を歩いていると出入り口の付近で立っていたセカンドに呼び止められた。

「先輩、飯食いに行きませんか？」

訓練施設ですつと一緒だった彼には元慰安部隊の母親がいる。本名はタイラという。タイラはアカメに懐いており兄のように慕ってくる。家族のいないアカメとしては彼の存在は貴重だった。人間らしい精神環境を整えられたのも彼の存在があったからこそだ。

「いいよ。タイラはなに食いたい？」

「そりゃもちろん、ウラワ食堂の塩焼き定食、白飯味噌汁大盛りです。先輩は？」

「煮魚定食、白飯豚汁大盛りだねえ」

顔を見合わせて口元で笑いあう。

ウラワ食堂は元暗殺部隊の主人と元慰安隊の女将が二人で切り盛りしている。営業時間は夕方七時から朝の七時までの隊員御用達の店だ。

二十名も入ればいっぱいになる店内の壁一面には来店客の写真が所狭しと貼られている。中には帰らぬ人となった隊員もいるが、大体が見知った顔ぶれだ。

例に漏れずアカメもタイラも任務開けには必ず寄る。

タイラがこれぞおふくろの味と言ったので、アカメもそうだと思っている。確かに施設や慰安会で食べるどの料理よりも美味しい。他の客も関係者と常連客のみで、唯一自宅や寮以外で彼らが安息を得る場所となっている。

「今度の任務かなり長期戦ですね」

ウラワ食堂の座敷席に着くなりタイラが沈んだ口調で言った。

「あっちの国の図書館読破しちゃえば？ タイラならできるよ。速読と暗記が得意なんだから、子供達にいろんな物事教えてあげなよ」

「ははっ、そうですね……、はい……」

なんとも歯切れが悪い。今回の任務の重さを憂いているに違いない。

「おれたち全滅したことないでしょ。全員帰還がアカメタイラ部隊の自慢だよ？」

ぽんぽんと肩を叩いてやると、いくらか表情を柔らかくした。

「ええ。なにがあっても隊員たちは帰還させましようね」

「うん。タイラもね、帰還しなきゃダメだよ」

タイラは自分がどうなるうとも他の隊員たちの帰還を優先させるつもりだ。それはアカメも同じで自分が死んでもタイラと他の隊員は帰還させたいと思っている。

アカメに家族はいないが、タイラや他の隊員にはいる。彼らを悲しませるようなことはしたくない。

「先輩も帰ってくれなきゃ困るんですよ。いくらモテるからってあっちの色街とかにはまらないで下さいよ」

「なーいない。おれがアツチ弱いのが知ってるでしょーよ」

ゲラゲラ笑いあって不穏な気持ちを一蹴する。そのうち定食も運ばれ、久しぶりの暖かい食事に舌鼓を打つ。

食事を済ませた頃にはすでに八時になるうとしていた。営業時間が押しても、主と女将は笑顔で見送ってくれる。

「またおいで」というのは、一種の願掛けのような、祈りの言葉のようなもので、皆「またくるよ」と返す。そうすると不思議とまた

帰ってこれるような気持ちになる。帰らぬ隊員たちも今来ている隊員たちも同じように挨拶をしてきた。前線を離れてもまだ辛い思いをしている二人を見ているとアカメもタイラも早く本当の意味での安息を取り戻さなければと奮起した。

途中の十字路でタイラと別れ、アカメは一人市場に向う。冬の空は格別に澄んだ色をしている。鮮やかな青に流れる雲を見上げると、昨夜の暗い森が同じ世界だったのかと疑いたくなるほど眩しかった。

慰霊碑は街から二キロほど離れた場所にある。見晴らしが良く海と街が見渡せる。かつてこの土地に溢れた戦死者はこの場所に搬送されそのまま埋葬された。戦闘隊員の中でも階級の高いものはすこし先の小高い丘に入れられた。

今はまだただっ広いだけのこの場所も三月頃に始まり五月頃には一面がネモフィラという瑠璃色の花で埋め尽くされる。ネモフィラは耐寒性の一年草でこぼれ種で増えていく。次から次へと新しい花が咲き、いつの間にかこの地を埋め尽くしてきた。それは人の営みと似ている。この国が、各国の人々が繋がり合い、美しい世界を作る。地面の下で悲劇が続いていたとしても、絶望を乗り越えて、糧として美しい花が咲く。そうであればいいと思った。

アカメは今朝彼女に貰った小さな花束を片手に持ったまま自分よりもはるかに高い慰霊碑にびっしりと刻まれた名前を目で追う。もちろん両親の名前は知らない。献花台に包んでもらった白い花束をそつとそえ、これから先自分のような子供が増えることがないようにと黙祷する。

返り血を浴びるたび、その温みに驚く。フラッシュバックするその映像を冷静に受け止めた。

ああ、また悲しみの種が、憎しみの種が、落ちていく。彼女の笑顔を守ることは、他の誰かの笑顔が消えていくことと同じなのだろ

う。

そう思いながらも、殺戮をやめられない。守りたいと思うのは、やはり、彼女と身近な人であり、自分にできるのはとても狭い範囲に限られている。その思いが少しでも広がるように、身近な人たちに伝えることしかできない。タイラには早く除隊して学校の先生にでもなってもらいたいというのだが、彼はアカメが前線にいる限りそれはできないといった。身勝手なのはお互い様で、アカメはそれ以上なにも言えなくなる。

つるりと表面を研磨された慰霊碑を夕暮れまで眺め続けた。死んでいった部下や殺してきた敵部隊の一人一人の顔を思い浮かべた。十五年の月日はあまりにも長すぎた。

夕闇が迫る市場は夕飯の買い物に來ている人で賑わっていた。花屋の前を通っていこうと遠回りをして歩いた。彼女を食事に誘ってみようと思いついたからだ。

花屋の入り口の硝子扉から中をのぞくと先客がいた。彼女と親しげに談笑している青年。魚屋で何度か見かけたことがある。彼女は両手に長方形の箱を持って顔を上気させている。

手に持ったままの小さなブーケのピンク色の花のような頬だった。花と彼女を見比べていると、青年が出てきた。アカメはさりと身を翻し建物の陰に身を潜めた。青年はアカメに気づかず、すこし離れた場所に待っていた女のところに駆け寄っていった。

「渡せた？」

白いマフラーに顎を埋めながら彼を見上げる小柄な女。

「うん。おまたせ。店番の子しかいなかったけど、一応お土産渡してきたよ。さ、なに食べる？」

二人は手を繋いで身を寄せ合うように歩いていった。アカメが物陰から出ると、彼女が看板を抱えたまま立ち尽くしていた。

「あなたそんなところでなにやってるんですか？」

彼女はアカメを見るなり尖った声で怪訝そうに目を細めた。

「あ、いえ。べつに」

うまい言い訳など考えつく余裕がなかった。困難な状況ほど無表情になる。彼女を目の当たりにするとひどく緊張してしまい、まったく言葉が出てこなくなつた。しかし、自分の中のタイムリミットは限られている。後退している暇などない。

「店じまいですか」

「はい。あ、あの、今朝は梶子ありがとうございました」

ぶつきらばうに頭を下げられ、アカメも頭を下げた。

「こちらこそ。素敵な花束をいただいて」

「どうせ売れ残りです。気にしないで下さい」

彼女は素っ気なく言うつと抱えた看板を抱くようにして店に入ろうとした。

「あの、飯でも食いに行きませんか」

「家で母が待っています。今日はすぐに帰ると言つたので無理です。ごめんなさい」

再び背を向けられ、思わず肩を掴んだ。

「じゃあ、明日。明日の朝はお母さんにご飯食べてくるつていつてから家を出てください」

「どうしてあなたにそんなこと決められなくちゃいけないんですか」
むつと唇を尖らせて彼女はアカメを睨む。

「おれにはあまり時間がないんです。だから、お願いします。二週間だけでいいんです。あなたと時間を共有したい」

「私、あなたのこと知りません。知らない人に突然そんなお願いされても困ります」

「……そうですか。わかりました……。明日また出直してきます」
食事を断られたとはいえ彼女に会えば時間の共有になる。そして最悪でも最終日に食事に誘おうと決めた。十日以上顔をあわせれば顔見知りくらいには認識されるだろう。

あつさり引き下がったようにまた明日くると言つた男を不可解に思いながら、マシロは看板を店内に運んだ。

思いを寄せていたトビヲに恋人がいたのはショックだったが、さ
っきの妙な男のおかげでうやむやになった。あのまま一人だったら
泣いていたかもしれない。痛くなった目頭は別の驚きのせいで涙を
出し損ねた。

「ほんと、変な人だ」

絶妙なタイミングで現われた変人のせいでつい吹きだしてしまっ
た。

梶子 一日目・夜

市場から慰霊碑の丘方面に歩き、林の手前で右に曲がると、元慰安隊員たちの住宅街がある。

花屋で働くようになって四ヶ月。惣菜屋と弁当屋、総合食材小売店などの面接を受けたがことごとく落ちてようやく合格した。落とされた原因に彼女の出身地が関係していることなどマシロは知る由もない。

十五歳まで普通の学校に通い、慰安隊志願者は二年間専用の訓練校に編入する。護身術と野外戦の基本、裁縫や料理を学ぶ。そして十七歳から十八歳になるまでの一年間は自由に過ごす。ほとんどの少女たちはこの一年間で志願を取下げていく。

現在、慰安隊員制度は存在しているものの、専用訓練校は花嫁学校として認識されつつある。規制はないに等しい。国勢が安定してきた昨今、その風習は悪習とみなされ制度自体をなくす運動が高まっている。

マシロの母親も一切干渉はしてこない。時代は変わっている。女子隊員は賄いだけではなく、諜報部員や連絡情報処理部員として活躍してしていると聞いている。その反面、元慰安隊員が戦闘員用の娼婦ではないのかと言いつつ口さがない一般人がいることも知っていた。口にはしないが娘が心変わりして普通の女として生きていくのを選んで、賛同しようと思っていた。

「あら、どうしたの。こんな時期に梶子？」

母子にはすこし広い平屋建ての引き戸を開けてただいまと言うと、暖かい空気と共に顔を出した母親が、娘の顔と梶子を見るなりそう言った。その顔はすぐにからかうような笑みに変わった。

「お店の新商品。ちよっと変な人がくれたの」

「へーえ。なにその変な人って、男の人？」

ブーツを脱ぐ為に腰かけている娘の肩に覆いかぶさるようにして顔を覗き込んでくる。

「ふっふーん。そりゃあ私だってお年頃ですから、そんな殿方も現われますよーだ」

鼻に皺を寄せ満面の笑顔で返す。

「あらら。若いって自信過剰ねえ。ま、あなたは自分の身は自分で守れるから心配しないけど、変な人っていうのは気になるわ。どんな人なの？」

「すごい白髪で眼帯つけてて額から顎のところにかけて傷があるの。無表情で片方は眠たそうな目してる」

マシロの大雑把な説明に母親は顔をしかめて考えるように数秒黙り込んだ。

「……元兵隊のおじいちゃん？」

「ちっがうよ！ 私より年上っぽいけどお母さんより若いもんね！でもね、その人特殊部隊員の服きてた。もう、お母さん重いよお。どいて」

母親を柔らかく押し返して振り向くと、呆然と見つめられていた。

「マシロ……」

「どうしたの？」

「その人、ヤバイよ」

「えっ……？」

ガバツと抱きしめられ、一気に不安が押し寄せた。もしかしたら本当の意味で危ない人なのかもしれないと、背中に冷たいものが走った。

「その人、すごい人だよ。ヤバイよ超高めの男だよ。マシロ玉の輿いい」

ぎゅうぎゅうと抱きしめられ、マシロは「ギブギブ」と繰り返す。「っていつかお母さんまぎらわしいよ！ マジでヤバイ人かと思っちゃったじゃない！ 若者言葉禁止！」

母親を引き離し、きれいな鼻梁に人差し指をぶつけた。

「えっへへ、ごめんね。でも、その人」

母親は目を伏せて声をひそめた。

「……間違いなく暗殺部隊の人だよ」

いまだ国の役所に臨時職員として事務のパートに出ている母親にも、銀髪のアカメの噂は聞こえていた。

「……やっぱり、そうだよな」

マシロも額をぶつけて呟いた。

「あのねお母さん。私ね、今日失恋したんだ。向かいの魚屋さんの息子さん、小学校の先生してる人、知ってるでしょ？」

「うん。知ってるよ。マシロ、最近彼の話ばかりだったもん。ねえねえ今日はシチューだよ。玄関は寒いから早く炬燵いこ。話ならそっちでゆっくり聞くから、手洗つといで」

「うん」

優しい母親の笑顔にマシロも小さく笑い返す。

母親は先に奥の部屋へ行く。ブーツを靴箱にしまつてマシロは洗面所に向かう。

手を洗い、うがいをしながら銀髪の男を思い浮かべる。

氷のように冷たかった。あの手で人を殺してきたのだらうと想像したが、いまいちピンとこなかった。

部屋に入るとシチューと蒸し鶏と大根のサラダとご飯が用意されていた。水で冷え切った手をすり合わせながら、炬燵に入る。

「うー、寒い寒い。いただきまーす」

手を合わせると、母親もいただきますと茶碗を持つ。

「で。マシロちゃんの失恋話は？」

「ああ、そうそう。その魚屋さんのトビヲさんって言うんだけど、今日学校で社会科見学があつてね、おかみさんにお土産持ってきてくれたの。恋人を外に待たせて。看板しまいに行ったら、二人が手繋いで歩いていくところを目撃しちゃった。以上」

「え。それ簡潔すぎるんじゃない？ もっと打ちひしがれた乙女の恋心とかないのー？」

「だって、その白髪の人が建物の間から出てくるんだもの。びつくりしちゃったよ。んで、なにいうかと思えば食事に行こうって。朝一で人にラッピングさせたかと思うとそれくれるし。だいたいさー、贈る相手にラッピングさせる？　普通は別のトコで買ってきて渡すでしょ」

「でもマシロ好きじゃん。梶子」

「そ、そりゃ好きな花だけど、催促したわけじゃないよ？　あっちが先にこれに気づいて、ちよつと花言葉とか説明しただけ。冗談で勧めたら買うつて言って、それでくれたの」

「へー。いい人じゃん。なんで食事いかなかったの？　美味しいものご馳走してくれたかもしれないのに」

「だって今朝早く帰るっていったじゃん。それに、お母さんシチュー作るって言ってたし」

「やだー可愛い娘。お母さん泣きそーう」

茶碗を置いて、両手で口元を押さえる。台詞のわりに口調が軽い。マシロはわざと冷ややかな目で母親を睨んでご飯を口に運ぶ。

「せつかくの素敵なお誘いなのもったいないなあ。なんで断っちゃうのよう」

「明日も来るって言ってたよ」

つい口を滑らすと、母親がまた口元に両手をやり、いかがわしい目をした。

「明日、お母さんご飯外で食べてきちゃう」

「変な気使わないで！」

「いいじゃない。行つてきなさいよ。せつかく失恋したんだから次いきなよ次。若いんだから」

「普通、娘にそんなこと進める？」

呆れて言つと母親はさらりと答える。

「だって、そんなに性急にアプローチしてくるって事はさ。その人なりふり構つてらんないんじゃない？　食事くらいいいじゃない」

冗談を言っていた顔とは打って変わって静かな声で、マシロをみ

る。

「そんな簡単に……。もし食事だけじゃ済まなかったらどうするのよっ！」

「それは貴女次第。それにきつと無理強いするような人じゃないわよ。ああいう人たちは国から管理されてるんだから。それにいつ死ぬかわからない状況にいるんだよ。貴女だって知っているでしょう」

母親の言葉に、絶句した。いくらもう少しで入隊するとはいえ自分には戦争が続いているという実感がない。心のどこかでもう何十年前の話だと高を括っていた。

「別に最後まで致してこいって言うてるわけじゃないよ？　おーいマシロちゃん」

母親の明るい声も虚しく、箸を置いてマシロはうつむく。

彼は一般民とは置かれている状況が違う。わかっているつもりだったのに、そう無言のまま言い訳したが、胸が痛んだ。そして、このまま入隊するべきなのか新たな迷いが浮かぶ。いつ死ぬかもわからない隊員たちの傍に行くということが、どれほど厳しい環境なのかまともに考えたことがなかった。だから、彼に対してあんな傲慢な態度に出たのだ。

「でも、だからってホイホイ身体を許しちゃうようなふしだらな娘に育った覚えはないんだからね！！」

「わかってるよ」

母親はくすくすと笑いながら、手を伸ばしてマシロの頭をなでる。

「ちなみに言つとくけど、白髪じゃなくて銀髪。彼は国家公務員の中でもずば抜けたエリートなんだよ。粗相のないようにね」

「テーブルマナーなら学校で仕込まれたもん。お母さんより大丈夫だもんね！」

「なーによ。OGを愚弄する気？　戦場の貴婦人と呼ばれたのはアタシだよ？」

「嘘ばかりー。顔に傷つくってなにが貴婦人ですか」

「だから、戦場の、っていつてるじゃない」

「はいはい。ご飯冷めちゃうよ！早く食べよう」
再び箸を持ってご飯に集中する。無邪気な娘の様子を見つめながら、母親は寂しげに微笑んだ。

鳥 二日目

昨夜は小さな花束を見つめて夜を明かした。切花は水を張った瓶に差しておかなければならないことを知らず、ゆつくりと萎びていく花を見ていた。

はりのあつた花びらが皺を寄せ黒っぽく変色してくったりと首を下げていく。その遅さは死にかけていく人の呼吸の間隔と間隔の合間にある長い空白に似ていた。

花びらが落ちた時、——息を引き取る時の、生が途切れる一瞬。刹那の音が聞える——、その音を思い出した。彼女がくれた贈り物の死を見届け、付随する記憶を辿って、顔を上げたときにはもう朝だった。

困った、とアカメは思った。今回の休養は時間の無駄が多い。せっかく彼女と話せたのに会えない時間が多い。名前もまだ知らない。今日は彼女の名前を聞こう。

そうして、着ていた服に手をかけてふと気づいた。着替えるのを忘れたまま彼女に会いにいつてしまった。アカメにとって、それはとんだ失態だった。標的から離れていたとはいえ、飛沫のついた服のままだった。服を脱ぎ捨て浴室へ急ぐ。シャワーを全開にして頭からつま先まで力を込めてこすった。

花屋の前に着いたのは正午近く。

浴室から出て着替えているとタイラが尋ねてきた。彼は母親が作って待っていたという大きなミートパイを持参していた。彼の母親は鯔の塩焼きより、アサリの出汁のきいた白ワイン仕立てのアイナメのアクアパッツアを作る。美味いんですね、とタイラは困ったような微笑を浮かべた。

アカメと小さな食卓に向かい合って、数種類の野菜が入ったミネ

ストローネよりあおさの味噌汁のほうが舌馴染がいいんですよ、とこぼしてミートパイを口に運んだ。アカメが、美味しいな。という、よかつたら全部食べちゃってください、と申し訳なさそうに微笑んだ。

まだ半分残っているミートパイが入った白い箱を見やり、開け放している花屋のドアを見た。

その向こうで彼女は一人で花に囲まれていた。床にしゃがんで背を向けるようにしてなにか作業しているようだった。アカメは店内に入る。普段から足音を立てないので彼女はアカメに気づいていない。

背後に立ってようやく落ちた影に気づいて、尻尾を踏まれた猫のような声をあげた。

「なんであなたはそう神出鬼没なんですか?!」

尻餅をついた彼女はアカメを睨むように見上げ、威嚇するような剣幕で言う。

「ドアが開いていたから、入ってきただけです。それよりミートパイ食べませんか」

怒らせるつもりなど毛頭ないのに、彼女は口を尖らせる。

「全然人の話きいてないんだから」

と口の中でぼやきながら立ち上がり、長いスカートの後ろを叩く。

「ミートパイ、食べませんか」

白い箱をぐいっと差し出すと、とりあえず受け取ってもらえた。

「せっかくなのでいただきます。おかみさんがもうすぐ帰ってくると思うので伝えておきます」

「おかみさんじゃなくてあなたに持ってきたんです。伝える必要なんてありません。召し上がってください」

彼女は小鹿のような黒い瞳で白い箱を凝視する。

「で、でも。私まだ休憩時間じゃないので、まだ食べません。仕事も残っていますから」

「もうお昼ですよ。だいたいこの時間帯が昼食じゃないんですか？」
「お昼の時間がずれ込むのはよくあることです。今すぐ食べなくても飢え死にはし……」

ぐつと唇をすばませて黙り込む。すこし俯く彼女を見てアカメは困惑した。

「ミートパイ、嫌いでしたか？」

「いえ、そうじゃないです。違います。食べたことないですけど……」

「美味しいです。後輩の母親が作ってくれたものなんです。味は保証しますよ」

「では、仕事が一段落したらいただきますね」

箱を台の上に置いて蓋を開ける。顔を近づけ匂いをかぐと小声で感嘆を上げた。

「いい匂い。お腹空いてきちゃいました」

「食べればいいのに」

アカメは箱から一切れパイを取り彼女の口元に持っていく。ラザニア風のミートパイからチーズがこぼれそうになり反射的にかぶりつく。

彼女はさつと顔を赤らめて一口分噛み切ると口を押さえて背中を向けた。

「美味しいですよ」

アカメは同意を求め、残りのパイを自分の口に押し込む。

「ん、んん……おいしいです……」

背を向けたまま何度も首を縦に振る。

アカメはパイを飲み込み、指についた肉汁をなめとって手を叩く。
「あ。おれ、あなたの名前が知りたいんですけど、教えてくださいませんか」

こっちの都合はお構いなしで話を進めていく銀髪男に文句の一つもいってやりたいところだが、昨夜の母親との話もあり、パイと一緒に飲み下す。口元を拭って、男に向き直った。

「……マシロです。ユキサトマシロ」

「ユキサト・マシロ。きれいな名前ですね。おれはアカメとかハマと呼ばれてます。呼びやすいように呼んでください」

さらりと褒められ、マシロは気恥ずかしくなったが当の本人は微塵も気にしていない。

「……ハマ・アカメさんっていうんですか？」

「いえ、ただそう呼ばれてます。親がいないので本当の名前がわかりません。だいたいアカメと呼ばれることが多いですね。ほら、おれ、目が赤いので」

アカメは黒革の眼帯を当てた左目を指差す。

「こつちの方はもっと赤いです。事情があつてお見せできませんけど」

「ごめんなさい……」

言わせてはいけないことを言わせてしまったかもしれないと申し訳なくなり、マシロは頭を下げた。

「どうして謝るんですか？ あなたはなにも謝るようなことではないのに」

アカメはマシロの近くに歩み寄り、のぞきこむために腰を曲げた。

「ち、近いんですけど……！」

肩を押し返すマシロの手首を掴み、じっと見つめる。

「あなたを近くで見たいんです。ご迷惑ですか？」

「迷惑です！ どうしてあなたってそう突拍子もないんですか！？」
きつぱりと言い切られて、さすがのアカメもがくりと肩を落としました。

うーうーと唸りながら頭を捻るその様子が珍しく、可笑しかった。

「どうすればマシロさんの迷惑にならないで傍にいられますかねえ」

「突然現れたり、突然パイを食べさせたり、突然顔を近づけたり、突然手首を掴んで見つめてこないでくれたら、たぶん大丈夫です」

「なら、事前にお断りすればいいですか」

「はい？」

「あなたに触りたいです」

「はあ?!」

変質者のような申し出を真顔で言われて、思わず後退り、かかとでバケツを蹴ってしまった。

「できれば抱き寄せたりしたいんですが、可能ですか」

「ふ、不可能です!!」

大きく両腕を交差してバツ印を作って見せると、アカメは寂しそうに目を伏せた。

「そうですか。やっぱり駄目なんですね」

「当たり前です! 普通見ず知らずの相手にそんなこと許しません!」

「普通、ですか。おれ今までお互いのことなんて一切知らない相手とばかり関わってきたので、こういうときに当たり前だといわれても、どういった手順を踏んでいくのかわからないんですよ。教えてくださいませんか」

教えてくれますかといわれても、マシロにも男女交際の経験はない。頭の中の予備知識をとっかえひっかえこねくり回しても漠然としている。答えかねて唸っていると、目の前の男は深い溜息をついた。

「あなたが嫌がることは絶対しません。おれ、そんな警戒されるほど変な男に見えますか?」

マシロはアカメを視線で上下になぞり、こくりと頷いた。

「えっ、それ本当?」

「私からしたら、アカメさんの風貌も言動も変です」

「変、ですか……」

広い肩だけではなく、せっかくの長身を丸めるように落とし、全身でうなだれた。

「や、でも、あの、今の言い方ひどかったですよね。すみません。アカメさんが悪い人ではないのは知ってます。ただ、もう少し突飛な行動を控えていただければ」

アカメのひどい落ち込みようについ絆されて歩み寄る。

「控えたら、仕事終わっておれと会ってくれます?」

右目が控えめにマシロに向けられる。マシロは二秒ほど視線を泳がせ、その右目を見返した。

「……今日、外食してくるかもしれないって母に、朝、玄関で言ってきました」

「マシロさん……、抱きしめていいですか」

「お断りします」

満面の笑顔で切り返され、広げた手のやり場を失った。

脱力して溜息混じりにマシロをみると変わらずニコニコと笑っている。

「可愛いんだか可愛くないんだかハッキリしてもらえませんか」

「可愛くなくて結構です。それより私お給料日前なので、二人で三千還以内でいけるようなお店にしてくださいね」

「あなた、アホですか……」

キツと睨まれ、咳払いで誤魔化す。

「おれはあなたに飯代を出させる気なんてないです。あなたはおれに付き合ってくれたらいいんです」

「でも」

「おれはあなたの条件を全部飲みます。だからあなたも一つくらいおれの条件飲んでくださいよ」

「……」

「でなければ今すぐあなたをさらって人に言えないようなことしますよ?」

穏やかな笑みとは裏腹に声が低い。

「そ、そんなことしたら警邏隊呼びます」

「すみませんがそんなもの怖くもなともないです」

マシロの表情がみるみるうちに強張り、全身が口喧嘩に負けそうな子供のように小刻みに震え出す。アカメのオーラが冗談では済まないほどの強迫観念を醸し出している。

「ご、ご飯代割り勘にするかしないかくらいの話じゃないですかあ……」

耐え切れずに目を潤ませながら、か細い声で反論をすると一気に場の緊張感が解かれた。

「マシロさん強情っ張りだから、ちょっとおどかしただけです。言つたでしょ。あなたが嫌がることはしません。でも奢るくらい許してもらえませんかね」

マシロが小さく頷くと、アカメが視界から消えた。

「アカメさん？」

足元に正座で両手と額をつけて伏せている。

「やり過ぎました。ほんとごめんなさい。二度としません」

「……それもやり過ぎです」

下にいたかと思えばもう目線が上にある。

「じゃあ付き合ってくださいますか？」

「……お食事くらいなら、全然。むしろ嬉しいです。こっぴつの、初めてです」

はにかむのをアカメが凝視している。

「マシロさん、だきし」

「駄目です」

きりつと牽制されて閉口する。

「じゃあ、もしこの花全部おれが買ったら仕事終わりますか」

「翌日の仕入れが大変でおかみさんが闘鶏できなくなりますね」

「ちようどいいでしょう。あの賭け事狂い」

「ふふふ。ひどい言い様ですね。でもこんなにたくさん花があっても一人じゃ持ちきれないですよ」

「皆に配ればいいんですよ」

アカメが穏やかな表情でいうのでマシロは笑った。

「素敵ですね」

「そうですか。ならお願いします」

微笑みながらお互いの間の空気が固まった。固まったのはマシロ

の思考だ。

「……冗談、ではない、んですか……？」

「おれは常に本気ですよ」

アカメは真顔で答えた。

梔子 二日目

マシロが会計に追われている間、アカメは小さな銀色の筒を懐から取り出し、口にくわえて息を吹き込んだ。なにか耳を澄ますような素振りを見せ、再び筒を銜えた。何度かくりかえすと、ものの二分くらいで背の高い黒髪の青年と金髪の少年が現われた。二人ともアカメと揃いの服を着ている。

「先輩、どうしたんですか」

「せんせー。任務ですかっ？」

金髪の少年は迷わずアカメに飛びつくとキラキラとした眼差しで見上げている。

「フウタ。この店の花全部でいくら？」

「二十三万六千二百八十還！」

「じゃあ、受付のホソノさんに言ってそれ貰ってきて。これおれのカードね」

「はい！ センセー！」

少年は元気よく返事をするアカメからカードを受け取り疾風のごとく姿を消した。マシロには何が起こったのか理解できないが、レジではじき出した計算と少年が言った答えが一致しているのは間違いない。

「先輩？ あの、なにをするんですか？」

マシロと同じくらい現状に取り残されている青年が首を傾げる。

「タイラ、奉仕活動だよ。おれと一緒に街の人にこの花全部配って鉢植えは小学校に寄付しよう」

「わかりました。ここにある花を全部皆さんにお配りすればいいんですね」

「うん、よろしく」

アカメはタイラに手を振ると、マシロに向き直る。

「マシロさんは小学校に鉢植え持っていった。運転はできるよね？」

「学校で習いましたから大丈夫です。配達も業務に含まれています」
マシロの答えに頷き、タイヤの隣に行く。

「タイヤなにしてんの？」

タイヤは作業台でせつせと水を含ませた紙で花の切り口を包んでいる。

「なにつて、こうしないと水がなくなつて切り花は萎れてしまうじゃないですか」

「切花つて水がいるの？」

「そうでしょう。花に水撒かないと枯れるじゃないですか。切花も花瓶に水入れて挿しとくでしょ」

「……………そうだね」

「俺の顔は四隅にはありませんけど。もしかして先輩、花好きなわりにこんな基本的なことも知らなかったんですか？」

「タイヤ。手が止まつてる。時間がもつたない」

アカメは聞えない振りをしてタイヤの作業を真似して花を包んでいく。タイヤは「はいはい」と答えて作業に戻った。

マシロは女主人に連絡をして花が全て売り切れたことを告げた。説明して信じてもらうのに十分はかかったが、彼女も忙しいらしくおぎなりの口調で配送に行くなら戸締りをして金庫にお金を入れて置くように言われた。ポットに入ったパンジーやビオラのケースを小さな配送車に積み込んで、店内に戻る。

「では、私は配送にいつてきます。アカメさん準備はできましたか？」

店内を彩っていた花はすっかりなくなって、アカメ一人、それに会計台の上に札束と硬貨が置かれていた。

「タイヤと部下達が配ってくれるっていうからおれも行きます」

「眼帯つけたまま運転できるんですか？」

「愚問ですね。それにあなたが一人で行くより効率がいい」

「どうせのろまですよ。戸締りするのでちよつと待っていてください」

「あなたがのろまだなんていつてません。早く仕事を片づけたいだけです。それにもう戸締りはしました。看板もそこにある。早く行つて済ませましょう」

「お金を金庫に入れてからいきます。裏から回つて出ますからついてきてください」

「わかりました」

アカメは頷いてマシロのあとに続いた。

表通りでは人が集まり、黒づくめの青年達から花を受け取つていく。助手席から花を手にした通行人の姿を眺め、巻き煙草を銜えて運転しているアカメを見た。

「皆さん笑顔です」

「君もね」

ちらりと黒目だけをマシロに向け、煙を吐く。

「それ、薬草ですか？」

「うん。吸引式の抑制剤。気が昂ぶってるから左目が疼いて仕方がない。だから誤作動を起こさないようにしているんです」

「誤作動？」

「なんでもないです。もしあなたが花に埋もれても気にしないでください」

「そんなことできるんですか？ その左目で」

「できる自信がある。いや、確信です。できます」

「じゃあやってみせてください！ 花まみれ！」

好奇心まるだしの瞳ではしゃきながらアカメの右腕をゆらす。

「検討しときます。でも花まみれだけじゃ済まないからきつとあなたは怒る」

「どういうことですか？」

「あなたの意思とは関係なくおれの意のままにすることができてもそれはおれも本意だ。だから君に左目は見せません。それに、現場以外で使ったことがないからこういう時にどうなるかわからないです。抑制剤が効いてるけど、万が一あなたを死なせてしまっ

たりしたらそれこそ本意だ」

アカメがいつていることは非現実的だったが、マシロは愕然とした。

「……言わないでおこうとも思いましたが、おれは一般人じゃない」「わかってますよ。一般人じゃできないことばかりして、いまさら教えてもらわなくてもわかります」

「いや、変人だって言っているわけじゃないんですが」

アカメはうんざりしたような声でいい、マシロはくすくすと笑って首を振った。

「私は慰安隊候補生です。十三日後に十八歳になります。父は暗殺部隊の特級階隊員でしたし、母も元は慰安隊でした。今は役所の事務員ですけど、アカメさんのこと知ってましたよ」

配送車を小学校の前に停止させて、アカメはマシロを見つめた。

「大丈夫ですよ。すこしですけど、あなたのことがわかってます」「マシロさん」

赤茶色の目に鼓動が早くなる。異性に免疫のないマシロは耐え切れず、視線を逸らした。見つめられるだけで極度の緊張を強いられる。しかし、アカメの視線は痛いほどマシロに注がれている。

「見るのも、ダメですか？」

「いえ。そんなことは、ないんですけど、恥ずかしくって、つい」うつむき加減にアカメを見返す。怯えるのが失礼に思えるほど優しい眼差しだった。

「マシロさん。怖がらないで下さい」

「こ、怖くなんてないですよ。ほんとにただ恥ずかしいっていうか、照れるというか、ちょっと近くないですか？」

「ここが狭いだけです。おれのせいじゃない」

「そ、それは、そうですね……」

「マシロさん。おれ、あなたが好きです。だから、あなたがおれのことをわかってくれるというのは、すごく嬉しいです」

相変わらず霞のような淡い笑顔だが、特別な表情に思えた。アカ

メの笑顔は、自然学の授業で見た極北の国のダイヤモンドダストと呼ばれる現象ように儚い煌めきにみえた。

鳥 二日目・昼下がりと夕暮れ時

校門から敷地内に入り、車両用道路を進んでいくと見知った顔があった。中肉中背、しかし一点の陰もない屈託のない青年、マシロが頬を染めた男。彼は車に気づくと大手を振りながらこちらに駆け寄ってきた。

「すいません。関係者証お持ち……、あれ、花屋の子、えーっと、マヒルちゃん？」

助手席のマシロに気づくと人懐っこい笑みを浮かべる。

「こ、こんにちは。トビヲさん」

マシロはぎこちない笑みを浮かべ、軽く頭を下げた。

「どうしたの？ 配送？」

アカメを挟んで、アカメはいないもののようにマシロに話し続ける。

「こちらの方が小学校に花を寄付してくださるそうで、その花をお持ちしました」

「寄付？」

ようやくアカメに視線を移したが、どこか訝しげに眺め回す。アカメの顔面の傷や眼帯がそうさせるのは仕方のないことかもしれないが、マシロはトビヲの態度に失望を覚えた。

「校長からそんな話あったかなあ」

髪を掻きながら首を傾げる。

「問題ない。カザブキ氏がスガワラ氏に会わせてくれ」

アカメは完全に車を停止させ、トビヲの前に降り立つ。予想していた以上の目線の高さにトビヲがたじろぐのが、マシロの目にも明らかだった。

「理事長と校長のお知り合いですか？」

「ああ。アカメと伝えてくれれば通じる。というより時間がないんだ。おれが直接行ったほうが早い。が部外者立ち入り禁止だということな

ら理事長室でも校長室でも構わないから君が案内してくれ」

尊大な態度が気になるのだろうが、トビヲは客人としてアカメを認識したらしく、表面的に丁寧に彼を校内へ案内し始めた。

アカメはトビヲについていったが、一メートルも離れないうちにマシロのほうに戻ってくる。

「なるべくすぐ戻りますから、ちゃんとここにいてくださいね」

わざわざそんな確認の為に戻ってきたのかと思うと可笑しかった。「もちろんです。子供じゃないんです。どこにもいきませんから安心していつてください」

トビヲを気にして小声で答えると、アカメは頷いて再び早足で校舎に向った。

マシロが花の入ったケースを荷台から下ろしていると、五分も経たないうちにトビヲが戻ってきた。授業はどうしたのだろうかと思いつつ、近づいてくるトビヲを見ていると彼は興奮したように駆け寄ってきた。

「マヒルちゃん、さっきのひと特級階級の国家公務員だって知ってた？」

本の中の英雄を目の当たりにした子供のように、前のめってはしゃいでいる。

「校長も理事長もたじたじでさ、あの人見た目怖いけどいいひとなんだな！ この学校の筆頭寄付主なんだって！」

「へえ？ 本当ですか？」

「うん。街外れの孤児院とかにも結構多額の寄付してるって、さつき教員主任に聞いてさー、やっぱ高給取りはちがうよなあ。ねねね、あの人もしかしてマヒルちゃんの恋人？」

「アカメさんが?! まさか！ お店の常連さんです」

慌てて両手を振ると、トビヲはあっけらかんとした笑顔で言った。「ああね。お得意様か。そりゃそうだよな。あの人雲の上の人だし。

あ、花ありがとう。あと僕が用務員さんとこ持って行くから。じゃ、ご苦労様！」

五段重ねのケースを軽々と持ち上げ、忙しく校舎へ走る。悪い人じゃないんだろうけど。そう思いながらもダダ下がりになった好感度を否めない。

「おれだつたら一度聞いた名前は忘れない。教師だつたら尚更だ。全校生徒の名前と誕生日だつて余裕だ」

背後から不機嫌な声がして、マシロは驚愕して飛び上がった。

「どっから降って湧いたんですか！！」

「ただ今戻りました」

「おかえりなさい。お疲れ様でした」

何気ない流れで頭を下げて答えると、アカメは一瞬右の眉を動かした。

「……ただいま」

「お、おかえりなさい……。なんですか？」

マシロが眉をしかめると、アカメはおもむろに頬を揉み解し始めた。

「……いえ。なんでもありません」

アカメはふいと顔を逸らしさつさと配送車に乗り込む。マシロは首をひねり、変な人だと思いながら助手席に乗り込んだ。

「じゃあ、なに食べたいですか」

市場へ戻る途中で車を走らせながらアカメは尋ねる。

「おいしいものがないです」

「……もうすこし具体的な対象があると助かります」

「えー、そうですね……。いきなり聞かれると浮かびませんね……」

……」

「じゃあ、手伝ってくれた部下達にも要望を聞きましょうかね。彼らも腹減っていることでしょうし」

「えっ」

素っ頓狂な声を出したマシロに一瞬顔を向ける。

「どうしたんですか？」

「い、いえ。別に……」

二人だけじゃないのか、と心のどこかで落胆している自分がいた。一度それを意識してしまうと、無性に恥ずかしい。ちらりと運転席に視線をやる。

アカメは黙って前を見つめたままだ。横顔も整っている。すこし開いた車窓から入り込む風に白っぽい銀髪が揺れている。

「あんま見られると落ち着かないんですけど」

「は、はひ！」

まさか感づかれているとは知らず、肩が跳ねた。

「うっかり口づけなんかしちゃいそうなのであんまり凝視しないで下さいね」

「ち、違います！！　なにおっしやってるんですか！　私はただそっちの景色を見ていただけです！」

「そうですか。それは残念です」

飄々と答えるアカメが憎らしい。同時に素直な気持ちを含み込んでいる彼が羨ましくもあった。

定食屋に連れられ、先ほど店で手伝ってくれていたタイラとフウタ、他に五人の隊員たちが集まってきた。トマジ、リュウセイ、シヨン、ムラサメ、ラウ、誰もが二十代の青年達ばかりで、アカメより気さくで陽気で、誰もがアカメを慕っていた。

そして何故かマシロのことをタイラの想い人だと思っている節があった。タイラは仲間たちにかかわれながら懸命に否定していたが、空気は変わらない。タイラの隣でマシロがアカメを盗み見ると彼は離れたところで黙々と箸を進めている。一切こちらを見る気配もない。

なんのために自分はここにいいのかと自問していることに気づき、頭を振った。マシロに好きといったアカメと、対角線上にいる男は

間違いない同一人物だというのに。消化しきれない気持ちが次々湧き始め、美味しいはずの食事がうやむやになっていた。

梔子 二日目・夜

アカメは脂の乗った白身魚の煮つけの骨を丁寧に取りながら、悶々としていた。

マシロをつれてきたはいいが、他の隊員たちがわらわらと群がり、何故か彼女はタイラの隣に座らせられ、自分は上座に置かれていた。「マシロさんって言うんですか。へー、あの花屋で働いてらっしゃるんですね。いや、名前どおり色白でおキレイですねー」

ムラサメはタイラと同じ年だが、女に対してノリが軽い。そして口が上手いのでモテル。齒の浮く台詞なんてお手の物だ。マシロにアルコールを勧め、飲みっぷりにさえ感嘆している。

「で、恋人とかいらっしゃるんですか？」

ショーンが悪意のない童顔をフル活用して誘導尋問を開始している。

「いませんよー。全然ご縁がなくてお付き合いすらしたことありません」

おおお、と座敷が男達の声で沸いた。トマジがタイラの脇をつつき、なにか目配せしている。タイラは手を顔の前でブンブン振って、アカメに助け舟を要請した。

「センサー、俺の魚の小骨みて。すごいでしょ」

フウタが別の小皿に抜き取った骨を元の配置になおし、一匹の魚の平べったい骨標本をつくって見せた。

彼は見た目も精神年齢もまだ子供だが実際年齢はアカメと同じ二十七歳だ。ホルモンの異常により十歳から成長が止まっている。しかし、動体視力と暗算、そして空間把握能力がずば抜けて高く、かつ、一度見たものを克明に描写することができる。内部調査のときに施設の地図や潜入国の地理を把握するのに一役買っている。訓練所の頃からの付き合いで、よく二人一組の野外戦演習をした。お互いはじかれた者同志だったが、訓練生の誰よりも秀でていた。アカ

メがフウタに体術の稽古をつけていたのでセンサーと呼ぶ。

「うん。すごいねフウタ。やっぱり天才だ」

表情を緩めて柔らかい金色の髪をわしゃわしゃと撫でてやると、
「でしょ?!」と満面の笑みを向けられた。

こんな調子でマシロと会話する機会はことごとく奪われ、あまつ
さえ自分達はいくら飲んでも殆ど酔わないのだが、一時間も経たな
いうちにマシロが出来上がってしまった。聞こえよがしにアカメを
変人呼ばわりし他の隊員たちは気まずそうに彼女を宥めにかかる。
アカメはやれやれと首を振り、なおかつチャンスだと踏んで彼女
を送っていくといったのだが、その役はタイラに回された。

タイラが一人じゃ無理なので先輩もお願いしますとアカメを指名
しなければ、なんの接点もないまま今日を終えていた。トマジがフ
ウタと一緒に職員寮へ帰り、あとの隊員たちは場所を変えて飲みな
おすというのでその場で解散した。

マシロはアカメとタイラに両脇から挟まれながら家路を辿る。

「大丈夫ですか、マシロさん」

「吐き気とかないですか?」

アカメが右から覗き込み、左からタイラに尋ねられる。

「だっ、だいじょうぶです……。ちよつと、クラクラして」

うつつと、呻きながら、なんとか自力で歩いている。

「先輩、申し訳ないのですが俺、呼ばれているので後お任せします」
タイラはそういつてアカメの返事も待たずに煙と共に消えた。

「みなさん、瞬間移動できるんですか」

タイラが消えたあとマシロは夜空を見上げながら言った。

「目眩ませしてその隙に移動してるんですよ」

「アカメさんもできるんですか?」

「そりゃもちろん」

「どーせほったらかしにするなら置いていつてください。一人で歩
けますから。タイラくんみたいにドロンとどーぞ」

「それはできません。こんな状態のあなたを置いていくなんて瞬間

移動より難しい」

「さつきは目も合わせてくれなかったじゃないですか」

マシロは口を尖らせ整備された歩道を睨んでいる。

「合わせたかったですよ。穴が開くくらい見ていたかった。マシロさん箸の持ち方きれいでしたね」

「あなたって、どうしてそんなこと恥ずかしげもなく言えるんですか。さぞかし色んな女性を褒めてきたんでしょうね」

「いえ。何も言わなくても事は済むような相手としか接したことがないですから、こんなことあなたに対してしか思いつきません」

「アカメさんって、ほんとキザで変人ですね。一体私のどこがいいんですか？ 名前も覚えられないような地味な女なのに」

「あなたの笑顔はとても素敵です。おれ、いつも心の中なんにもないんですけど、あなたの笑顔だけは一瞬で思い出せます」

マシロはハツとしたようにアカメを見た。

「マシロさん？ そんなに見つめると、うつかり口づけますよ？」

返事はない。マシロは視線を迷わせ、おずおずと戻した。アカメは寒さで赤くなった頬に唇をつけた。

「早く帰らないとお母さんが心配しますよ」

手を取られ、そのまま引つ張られるように歩き出した。鼓動が早くなっている。空いているほうの手で頬を軽く押さえる。あまりに一瞬で実感がない。アカメを盗み見ると、平然とした表情のまま耳まで赤くしている。

「寒いですねー。耳まで赤くなっちゃうくらい寒いですー」

からかって言うと、アカメはいじけたような横目でマシロを睨んだ。

鳥 二日目・深夜〜三日早朝

マシ口を家の前まで送り、そのまま慰霊碑の丘に向かった。

初めて彼女を花屋で見たとき、何とも思わなかった。先ほど本人が言ったとおり地味で、彼女くらいの歳の娘達のような飾り気も化粧気もない。

褥に転がり込んでくる女達や彼を金と見る人間たちのように媚びることもなかった。むしろ、アカメを前にすると緊張するのか表情も硬かった。

花と他の客に接する時には笑顔を見せる。自分から話しかけることもなかったので仕方がないと思っていたが、そう思うこと自体今までなかった。

そのうち花屋に立ち寄っても、すぐには店内に入らず彼女の接客を眺めるようになった。

同性のなじみ客だと世間話をしたり、笑顔の頻度も高い。子供連れの客には笑顔のほか、売れ残りの花を子供にプレゼントする。恋人に花を選ぶ男性客にいろいろ尋ねられれば、花言葉の辞典を引っ張り出して一緒に悩む。アカメが店内に入ってくるとやはり表情がすこし強張った。

教え込まれてきた愛国心。自らを投げ打って死守すべき民。プログラミングされた慈愛に疑いはないが、彼女を見ているとその真意が理解できる。漠然としていた意義が確固たるものになった。

頬へのキスで全身から汗が滲むことも、繋いだ手が柔らかく小さなことも、彼女によって気づいた。

全ての人にあるそれらを守る反面、奪ってしまう。そんな負の連鎖を断ち切る為、行かなければならない。アカメは慰霊碑を見上げる。マシ口の手の温もりが残った手を握り締め小さく頷いた。

部屋に帰り着き、シャワーを浴びて、寝具に潜り込んだ。たいした疲労感はないが、心地好い眠気を催していた。

日付の変わった頃、アカメの睡眠はタイラの呼笛で打ち切られた。呼笛を返し、すぐさま街へ急いだ。

ウラワ食堂に着くと、すでに中階級隊員のヒラスが奥の座敷席でアカメとタイラを待っていた。ずいぶんな量の酒を飲んだらしく、主がアカメの顔を見るなり、深刻そうな顔で首を振った。

「どうしたの、ヒラス。珍しいじゃない。こんなに飲むなんて」
アカメは酒で酔う体質ではない。しかし、ヒラスはそこまで身体を慣らしていない。二升も飲めば足元が覚束なくなる。

ヒラスは青ざめた顔でしばらく黙っていたが、ようやく唇を震わせた。

「――隊長、副隊長、折り入ってお話があります」

前々回の任務中に幼馴染の女と情を交わし、今回帰ってきた時には臨月を迎えていた。ここ数日で子供が生まれるかもしれないと、ぼそぼそと告げた。

タイラがアカメに目配せをする。沈黙のなか、ヒラスは座敷から飛び降り、額を板張りにこすりつけた。

「こんなことをお願いするのはもってのほかだとわかっています。しかし、自分は生まれてくる子供と妻を置いて任務には就けません！！　どんな処置も受けます。ですから、お願いします！！　任務から外してただけませんか！！」

アカメはヒラスを見下ろし、タイラに目配せを返した。タイラは何の反応も示さない。

小さく頷くとアカメも座敷から降り、ヒラスの襟首を掴み上げ、顔を思い切り殴りつけた。

「おい！　アカメ！！　同胞に何をする！！」

主人が怒鳴りつけると、アカメは無言ままヒラスを引きずっていく。店内に緊張が走った。来客がアカメを取り押さえる為に殺気立

つたが、ここにいる全員が束になったとしても彼を抑えることなどできないとわかつている。隙を覗くような気配が蜘蛛の糸のように張り巡らされた。周囲を一瞥し主を鼻で笑う。

「同胞ですか？ この男は反逆者ですよ。国の命運をかけた任務を、たかが自分に子供ができたくらいで辞退するといっているんです。こんな屑が同胞だとは、ウラワさんもずいぶん耄碌したものだ」

ヒラスを片手で引きずりながら店を出て行つた。引き戸が閉められ、緊張感が緩む。タイラに全員の視線が集中する。

「ああなつた先輩を止めるなんてすくなくとも俺には無理です。殺さない程度には抑えますけど、期待しないで下さいよ」

タイラは肩を竦め、深い溜息をつきながらアカメたちの後を追つた。

路地裏から微かに乱れた息と呻き声が聞えてくる。タイラは常人では気づかないほどの音を頼りに歩みを進める。

口を塞がれ、指を一本ずつ折られて血まみれの顔面を腫らしたヒラスが転がっていた。

「うわ。ほとんど半殺しじゃないですか」

「ふざけるな。こんな負け犬生かしておいてやるだけでも多大なる恩赦だ」

「せつかく赤ちゃん生まれてくるのに、当分抱っこしてあげられないじゃないですか」

アカメはヒラスの腹を蹴り上げ、前髪を掴んで上を向かせる。

「こんな屑が父親なら生まれてくるガキも屑に違いない。いいか、ヒラス。貴様の糞ガキを俺たちの関係者に一切近づけるんじゃないぞ」

そのまま後頭部を壁に押しつけ、腫れ上がった瞼で薄目を開けるヒラスを睨み据える。気を失つたのを確認するとタイラに向き直つた。

「召集だ。他の隊員たちの見せしめにしろ」

「先輩」

「早くしろ。それにその呼び方はするな」

殺気だった目で見据えられ、タイラはそれ以上いわずに呼笛を口に銜えた。緊急招集の音階を数回繰り返すと、どこからともなく二人の若い隊員が現われ、アカメたちを見やると唾を飲みこんだ。

「隊長……なんですか、これは」

まだ十九になったばかりで今回初任務となるジキがヒラスに駆け寄る。

「ヒラスがなぜこんなことになったんですか。まさか敵が密入国しているわけじゃないですよ」

トマジは切羽詰った声でタイラとアカメに問い詰める。

「これはどういうことなんですか。ここにはあなたの殺気しか残っていない」

ジキはヒラスの息を確かめると応急処置を施して、アカメに詰め寄った。

「敵襲じゃない。お前の言うとおりやったのはおれだよ」

アカメは血の凍るような残忍な笑みを浮かべ、困惑している部下達を見やる。

「コイツはおれに任務から外してくれてさ、頼み込んできたんだよ。たかが自分に子供が産まれるくらいで。国家の命運をかけた任務から逃げ出そうとしたんだ」

部下達の表情が強張り、困惑が深まる。

「屑だろ。こんなやつボロボロにしたって無駄に疲れるだけなんだけどね。ケジメつけてもらわなきゃでしょ。だからさ、おれのやり方に異論があるんなら今のうちに部隊から外れる。な？」

「あんたには……」

ジキがしぼりだすような声で言った。

「……隊長には、肉親がいないから……、守りたいと思う相手がないから、こんなことが平気できるんだ……。任務だって本当は楽しんでるんじゃないんですか……？ 顔色一つ変えないでこんな

こと……。あんたは人間じゃない……」

「ジキ！」

トマジがジキの肩を引き寄せる。

「先輩だって隊長の噂はご存知なんでしょう?!」

ジキはトマジを押し返し、アカメに掴みかかったが、あっさりとかわされた。

「生まれながらの殺戮兵器だってね。知ってるよー」

アカメは背を向けてひらひらと手を振り、一人で表通りへと去った。

「……タイラさん。どうしてですか。隊長は狂ってるんじゃないですか？ 普通隊員に子供ができたなら祝ってやるもんじゃないんですか……?」

「……うん。そうだね」

タイラは嗚咽を漏らすジキの頭を撫で、溜息をついた。

「トマジ、長官へ報告よろしく。ジキはヒラスを病院に連れていつてあげて。俺は殺戮兵器を回収してくるから」

タイラが後を追おうと踵を返すと、トマジが口を開いた。

「ジキ、君は部隊を辞めるかもう一度訓練を受けなおいべきだ。感情的になって物事の裏を読めなければ隊員は務まらない」

「トマジ。余計なことを言う暇があったら報告に行くべきだ。これ以上ヒラスを放置しておくのも良くないよ」

「申し訳ありません。副隊長」

トマジは敬礼をして煙に姿を消した。

「部隊なんてクソ喰らえ、です。副隊長」

ジキもタイラを抱え上げると同じように去っていった。

「……糞も血ももう飽き飽きするほど喰らってきたよ」

タイラは視線をヒラスの血痕に落とし、アカメが向ったであろう場所へ急いだ。

とりわけ急いだつもりだが、慰霊碑の前にはアカメとすでに先客

がいた。

「なあ、あんた。うちがなんでここにおるか、理由知ってはいますか？」

艶のあるすこし甲高い声が聞こえる。妙な話し言葉。それがやけに色っぽいと評判の女――、タイラは確信した。

「そら、ご存知でっしゃろな。あんたはんがお仲間半殺しにして病院行きにしてもうたんやから」

眉の上で切りそろえた漆黒の髪。頬にかかる前下がりのボブヘア。睫毛のびっしり生えた切れ長の目はどの娼婦よりも妖艶に相手を魅了するが、けっして商売女ではない。拷問・尋問情報課の制裁担当人・アゲハだ。身体に張りつくほどサイズの小さな支給服を自分でアレンジしかなり露出の高い格好をしていて、寒くないのだろうか。とタイラは余計な心配をしなければならない。

「――聞いてますのん？ アカメはん」

「で。処罰は」

「うちの顔見てちいーとも反応を示さん木偶はあんただけや。なんやつまらんのう。うちの技使ってその鉄面皮をぐっちゃぐちゃしてやりたいところやけど、お上はんはあんさんに任務続行の命を下しよってなあ、ただし、メンバー変更や。あんさんのせいで規律が乱れよった。ジキとかいう兄ちゃんがあんさんとは仕事できひんっていいおったわ。危険因子と見做されとるんやで。そやからなあ、あんさんと、うち。そしてそこでストーカーしとる坊ちゃん。三人でな、敵さん殺めて来いっちゅう御達しや」

気づかれていたかと肩を竦めたが、気配を消していたわけでもない。

ただ出るタイミングを逃しただけだ。

タイラは両手を上げて木陰から出た。

アカメがタイラに向かってヒラヒラと手を降る。タイラも振り返す――、やり取りを苛立たしげに睨みながらアゲハは続けた。

「――んで、任務終了後、あんさんはうちの玩具にしてええってこ

となんやけど、どないでつしやる？」

「悪くないな」

「故郷の土、二度と踏まれへんっちゅうことやけど、それでもええのん？」

「決定事項ならおれはそれに従う」

「そやから、あんさん面白うないねん。奥歯ガタガタいわして泣き叫べば可愛いもんに、ちいっとも顔色変えへん。うちの座敷牢に監禁して責め苦の極楽、味合わせたりまひよか。飼い殺しにしたつたるよつて」

「冷血アゲハが情状酌量なんて、後世に笑い話を残したいのか」

「アゲハさん、昔から先輩のこと好きでしたもんね」

「お黙りやつしや。だいたいなあ、英雄とかいう勘違いした男はんはドMに決まっとんねん。自己犠牲とかいうマスターベーションに陶醉しとるだけやる。せやからな、うちが手伝うたる。苦痛の極楽浄土見せたるわあ」

「……だそうですよ、先輩」

「でもさ、別に英雄とか思ったことないし、大体おれ痛覚だいが鈍いんだけど、どうなの？」

「さあ？」

アカメとタイラはぞくぞくと身体を震わせるアゲハを尻目に肩を竦める。

「あーもーほんま面白くない男やな！ 任務終わったらすっぱり死なせたるから楽しみにしときー！」

「責め苦はお前の趣味だろう。最期くらい付き合っよ」

「ふん。あんさんみたいな達観した男の澄ました面歪ませたるんも一興やわ。よろしおす。付き合おうてもらいまひよ」

アゲハはじゅるりと舌なめずりをすると、嬉しそうに笑って身震いする自分を抱きしめた。

「あんたはんの能面みたいな表情の乏しい顔が苦痛に歪むのを楽しみにしてるで」

嬌笑を響かせ、煙と共に姿を消した。

梶子 三回目

「——まったく……、先輩の下手くそな芝居に付き合う俺の身にもなつて下さいよ」

完全に辺りの気配が消えるのを待ち、タイラは溜息をついて頭を垂れた。

「あはは。作戦って言うてよ」

「あんな猿芝居に引っかけってくれるのはジキだけです。トマジだつて必死でしたよ。ジキが部隊に不信感を持つちやわないようにフオローしてくれました。効果は期待できませんけど」

「損な役回りばかりさせてごめーんね」

「ほんとですよ……。任務中ならまだしも、こんな内輪もめで……」
うつむいたタイラの頭にぽんと掌を置く。

「おれと関わったのが運の尽き。毒を啖ば皿までよろしく」

「いやだつて言ったところで聞いてくれる気あるんですか」

タイラの芝生のような髪をわしゃわしゃと撫で回して、ゆっくりと歩き出した。

「待つて下さいよ。アゲ八さんが動き出したつてことは、先輩見放されたつてことじゃないですか。いいんですか」

「いーんだヨ。そんなことよりさ、ヒラス、あいつちゃんと任務から外されたかなあ？」

タイラは苛立ちをぶつけるように頭を掻いて溜息をついた。

「そんなことつて……。外されるでしょ。あれだけやれば肅清人も手出しはできません。完全に矛先は先輩に向つてます。今頃ジキが部隊内で先輩が仲間も殺す殺戮兵士だつて触れ込んでるでしょうね。明日には民間の人権提唱団体の提携新聞社が号外だすんじゃないですか。それより、アゲ八さんの言つてたこと、ちゃんと聞いてました？」

「聞いてたよ。おれが抹消されるつてことは、戦争が終わるつてこ

とだろ？ おれみたいな殺戮兵器が用済みならいいじゃん」

「そうですね。先輩殺されたら、俺も死ぬことにします」

「ダメだよ。タイラが生きててくれないと、あの子とおれのこと話してくれる人いなくなっちゃうじゃん」

「贅沢言わないで下さいよ」

「いいじゃん、少しくらい。それに、やっぱりいつまた戦争が起くるかわからない。二代目アカメという重い役割タイラがしなくちゃなんないかも知れないし」

「もしそんなことが起きたとしても俺年取ってるかも知れないじゃないですか。勝手に任命しないで下さい」

ふて腐れた顔は少年時代から変わっていない。タイラの大きな唇は歪にぎゅっと締められ、遠くの闇を睨んでいる。

「んじゃ、おれ帰るね。今回の休暇はあの子と過ごすって決めてるんだ」

タイラの両肩をよろけるまでバンバンと叩いて、にっこり笑うと煙と一緒に姿を消した。

翌日、マシロは頭重と胸やけに苛まれながら、よろよろと寝室を出た。台所から根菜の味噌汁の匂いが漂い、居間には母親が娘を待ち構えていた。

「おはよお……」

寝巻きのまま炬燵に足をいれて突っ伏す。マシロの姿を見て母親が大きく溜息をついた。

「なんなのだらしない。そんな姿見られたら呆れられちゃうよ」

「だって……。すっごい飲まされたんだもん。隊員の人たちってなんであんなお酒強いのお？」

「あの人たちは特別なの。無理して付き合わなくていいのよ。まったく。で、進展あったの？」

マシロの脳裏に昨夜のささやかな、しかし二人にとっては急進展の頬へのキスが浮かぶ。

「な、ない！ 家の前まで送ってもらっただけ！」

「顔赤いんですけど？」

「はあ？ 気のせいじゃないの？ 今日暑いし」

「今日は雪降るらしいよ。あー、暑い暑い。せつかく家の前まで送ってもらったんならお母さんもアカメさん見たかったなあ。美丈夫なんでしょう？ あーあ、いいなあー青春青春」

「美丈夫だったって眼帯してるんだよ。確かにキレイだけど、大きな傷あるし」

「勲章つて言いなさいよー。私にだってあるもん。キレイだななんて認めちゃって、あー熱い熱い」

ばたばたと手で顔を仰ぐ真似をしながら台所にむかう母親を睨んで送り、額を天板に置く。

「青春なんて甘酸っぱい感じじゃないよー……」

小さな声で呟き、ぼんやりとアカメの姿を想像する。その背後には死が色濃い影になって佇んでいる。彼は暗殺部隊の隊員なのだ。

アカメが半端な気持ちで現われたのではないことはわかっていて、けれどたった二日で彼に絆されている自分が許せない。お互い子供ではない。マシロだって、経験はないにしろ恋愛の終着点が何であるかくらい知っている。

だからこそ甘い言葉を囁かれてすぐその気になる女と思われたくない。その上、一生をかけて決める相手にするにはアカメに対する好意はまだ淡い。もっとじっくり時間をかけて知っていきたいところだが、そもいかないらしい。二週間。彼は期限付きで時間の共有を申し込んできた。母親が言っていたように、なりふり構ってられないのだろう。マシロに対して愛情の剛速球をどんどん投げかけてくる。はぐらかす隙もない。

自分よりも綺麗な人はたくさんいるだろうに。そう思うと、もやもやが強くなる。アカメの話し振りからして女の影は決して少なく

はなさそうだ。

「ねーねー、物思いに耽るのはいいけどさー、マシロちゃん時間大丈夫なの？ もう六時過ぎたよ？」

四角い盆に朝食を乗せ、母親が目の前に味噌汁椀を置いた。

「嘘！ まだ髪の毛梳いてないし、なんの準備もしてない！」

「そんなこと言われても。ご飯どうする？ お米食べる？」

「おみそ汁だけでいい！」

マシロは言うが早いか炬燵から飛び出して自室に駆け戻った。

せつかく母親が作ってくれた朝食もろくに摂らず、走って出勤したのだが、花屋はもぬけの殻だった。

合鍵を使い、中に入ったのだが金庫は開け放たれたままで、作業台の上には昨日のミートパイがそのまま残っていた。

ミートパイへの申し訳なさや嫌な予感が背中を伝い、ただでさえ寒いのに余計に身体を震えさせる。

「嘘……、泥棒？」

不意に背後に気配を感じ、マシロは振り返り様に回し蹴りを繰り出した。

足首を捕まれ、よろけると肩を抱きとめられる。

眠そうな重い瞼の赤茶色の瞳が間近にあった。

「いやあ。お見事です。普通の男なら顎にモロ喰らってたでしょうね」

「きゃあああああつ！」

マシロは高くあげられた片足のスカートの裾を抑え悲鳴をあげた。

「なんなんですか！？ っていうか、手え離して下さい！！」

「離したらマシロさんが倒れちゃうじゃないですか」

「足首！ 足首離して下さい！」

「踊ってるみたいじゃないですか？ せっかくなので踊りませんか。おれ、結構、リード得意なんですよ」

本人にその気はないのだろうが、女の影を匂わせられ、マシロは妙に腹立たしくなった。

「踊りません。怒りますよ」

ぐつと拳を握ってみせたがアカメはまったく動じていない。それどころか、怒った顔も可愛いですね、と凝視してくる。

その余裕ありげな発言もカンに障る。

それなのに頬が熱くなり、心臓がバクバクと暴れだす。

「マシロさん、脈拍乱れてますよ？ 顔も真っ赤だ」

飄々とした口調で耳元でいわれカツとなり、つい空いている手でアカメの頬を打ってしまった。

しかし、アカメはびくともしない。驚いた顔すらしない。それがマシロの腹立たしさに油を注いだ。

「いい加減にしてください！ 私、アカメさんみたいに手慣れたるわけじゃないんで、こんなことされて冷静でいられません。からかわないで下さい！」

ぐつと足に力をいれ、身をよじると肩を支えられたまま、ようやく解放される。息つく間もなくアカメに手を取られ、そのまま胸に押しつけられる。

マシロほどではないがアカメの鼓動も決して穏やかでない。

「おれ、からかってなんかいません。冷静なんかじゃありません。マシロさんの鼓動と同じくらいかと思っていました。だからおれの心臓の音もマシロさんにつつぬけたと思っていましたが、違うんですか？」

「ち、違います……。アカメさんの方が全然落ち着いています」

マシロが顔を背けると、アカメは俯いて自分の胸を押さえた。

「……おれにしてはかなり早いんですけど……」

心なしかアカメの声が沈んでいる。

この人には悪気がない。だからこそ余計に質が悪い。

マシロは思いながら、打ったことを後悔した。

「いきなり……叩いてすみませんでした……」

頭を下げると、よしよしと撫でられた。

「おれ、マシロさんというると血が通った人間だって実感できるんですよ。心臓の音とか体温とか実感できてすごく新鮮なんですよ」

眠たげな目が優しく映る。アカメの言葉が哀しい。自分の行いが稚拙でくだらないかを思い知らされる。

「大体なんであなたがこんな朝早くにここにいるんですか」

素直になるにはなんとなくばつが悪く、よくないとわかってるのに声が素っ気なくなつた。

「仕入れをしなきゃならないってあなたが言っていたから、男手が必要かと思ひまして馳せ参じました。でも、どうやらそれも要らないようです」

「アカメさんのお手を煩わせる必要ありません。私とおかみさんで仕入れくらいできますから」

自分の斜め上を不遜ともいえる目つきで見上げる。

「いえね、そのおかみさんが、ほら」

アカメは尻ポケットから紙を取り出して広げてみせる。

【誠に勝手ながらしばらくの間、臨時休業させていただきます。F
lowerメジロ】

「……………はい？」

視線で字面を追い、マシロは気の抜けた声を出した。

「りんじ……きゅうぎょう……？」

「臨時収入が入ったからでしょうねえ」

何食わぬ顔で言うが、昨日の売上に足して軍資金を渡し、賭け事狂いのおかみを唆したことは黙っていた。

「嘘……」

マシロは真っ青になって愕然と呟いた。

鳥 三日目

ほとんどがらんどうになった店内ではどこからか風が吹き抜ける音がした。

ミートパイは時間が経っているのに油が白く固まることもなく、茸の風味が肉汁と程よく馴染み、そこらの既製品より随分味がよかった。

部下の母親が作ってくれたと聞いていたが、よほど愛されているのだろう。マシロにも覚えがあるので容易に想像がつく。日常なら味噌汁だが、特別な母の味といえば焼きプリンだ。

アカメはちゃっかり作業台の上に座り、マシロはその斜め向かいに簡易椅子を置いて座っている。

無言のまま、パイを口にいられている彼はどこか無感動な表情だ。

彼にも思い出の味というものがあるのだろうか。

ふと思いついた疑問に自分で傷ついた。

一人ぼっちで今まで生きてきたんだろうな。そう思うと胸が痛んだ。

仲間と教育者、そして上司。周りに人はいても、決して独占できる相手でもなければ、ましてや自分が与えられてきた類の愛情とは別物だったのだろう。

「アカメさん」

「はい？」

「美味しいですね」

パイをかかげて笑って見せると、自分でも持っているくせにマシロのパイにかじりつく。

「あつ。私の！」

「……え？ くれたんじゃないんですか」

「……むう。じゃあ、そういうことでいいです」

「ありがとう」

「ちょっと！ そのまま食べないでください！」

指先までくわえられ、驚いた拍子にパイを落としてしまった。アカメはそれも拾って口に入れる。

「あつ、それ汚いですよ」

慌てて止めようとしたが、すでに飲み込んだあとだった。

「汚いですか？ 地面に落ちたくらいで貴重な食料を捨てるなんてできないですよ」

当たり前前の口調で言われ、マシロは言葉を失った。その一言で環境の違いを思い知らされた。

マシロが黙っていると、アカメは不思議そうな顔で首を傾げる。

「……マシロさん？」

「ごめんなさい……。私、野外戦の模範演習とか、応急救護とか、部隊の心構えとか習ってきたのに……何もわかってなくて……。なんだか、甘つちよろいですよね」

「ん……。まあ、こういうのは経験ですから、実際やっていかないと理解しろっていうほうが無理でしょう。むしろ経験なくて済むならそれが一番です」

諭しながら頭を撫でてやると、幼気な眼差しで見上げられ、アカメの胸の中はじんわりと暖かくなる。

「でも……」

「まあ、いいじゃないですか。平和なら」

「平和だからって片付けちゃダメです。少なくとも私はアカメさんと一緒にいるんですから！ だから、私、これから食べ物をもっと大事にします！」

ぐつと両方の拳を胸の前で握り、子供のように息巻く姿が可笑しく、同時にとても愛しい。

「おれと一緒にいるって思ってくれてるんですね」

顔の筋肉から力が抜けた。

「アカメさん……。笑った……」

小鹿のような無垢な漆黒の瞳が大きく揺れる。

そのきれいな瞳が近く、柄にもなく焦ってしまった。

咄嗟にアカメはマシロの唇に自分の唇を重ねてすぐに離れた。

「……」

先日みたばら色の頬が近距離にある。

「……」

怒鳴られるか、打たれるか、瞬時に覚悟はしていたのだが、マシロは動かなかった。ただ、顔を赤らめて、瞳を潤ませ、アカメを見つめている。

「……好きです。マシロさん」

マシロは黒目をさ迷わせ、唇を震わせた。

「……こい……」

「……はい？」

「……恋、しちゃった、みたいです……。こんなに……簡単に……落ちちゃうなんて……自分が許せないんですけど……。でも……。どうしよう……。嬉しいです。アカメさんに……。好きって言われて……。キスも……。でも、私、こんな、簡単に……」

うつたえているマシロの頬を両手で挟んで上を向かせる。

「マシロさん。おれは本気ですよ。あなたはどうですか」

「遊びや気まぐれでキスなんて嫌です」

「なら、おれのこと遊びや気まぐれではないんですよ。嬉しいなあ」

「でも、私たち、まだ知り合って三日くらいで、まだなにも知らないのに……。こんな」

「三日って、おれからしたら長いですよ。それに、始めは誰でも知らない者同士でしょう。そう長くはないですけど、これからお互いのこと知っていきましようよ。でもおれ、自分に関することなんてあんまりないんですよ。今マシロさんの目の前にいるおれがそのままおれなんですけど、不安ですか」

マシロは首を横に振る。

本当に不安なのは、今ではなく、未だ来ていない十日と少しの先

の時間。そして失われることが前提の男だとわかっているのに、角砂糖のように端から溶けている自分の理性。

「……甘言にほだされているようじゃ、ダメですね」

俯き、アカメの腕を弱く押し返す。

「甘言じゃないですよ」

アカメはムツとして声を低くいう。マシロはアカメの腕をしっかりと掴み、赤茶の隻眼を見つめた。

「アカメさん。私、あなたがいる限り、これから他の誰かに甘い言葉をかけられても揺らぎません。決めました。だから、信じて下さい」

「疑うわけじゃないですか」

もう一度口づけようとアカメが首を傾けると、掌で口を塞がれた。

「……おれのこと好きになっただんですよね？」

「でも、だからって、そう何度も一日にするのは……なんか、ちょっと……」

口の中でもごも言いながら、マシロは床に視線を這わせる。

「せっかく気持ちを通じ合ったんだからちゃんとしましょうよ。だいたい一日に何回でもしたって減りませんよ」

「でも、こういうの初めてなので、照れくさいんです。恥ずかしくて、それに、男の人と自分がこんなことしてるのって、罪悪感が、なんとなく」

「……わかりました。じゃあ、無理強いはしません」

マシロの身体をかわすようにすり抜け窓辺に背中をつけた。朝日が差し込みアカメの銀髪が透けるように輝いた。マシロは短く目を細める。そのまま光に溶けてしまいそうで、思わず手を伸ばすと、しっかりと受け止められ、そのまま引き寄せられ、抱きしめられた。「やっと、実感がわきました。守るべきものがあると強くなれるって意味を」

甘言と一蹴できない響きの強さに胸がしめつけられる。そして少し落胆する。

この男は使命ありきなのだと。

全身に微かな温もりと過ぎるほどの力強さを感じられるのに、どこか遠い。

半ば上の空でマシロはアカメの背中に腕を絡めた。

蚊帳の外の対岸の火事

タイラは夕食の買い物のために市場を歩いていた。寮暮らしであるとはいえ、仕送りの足しに賄いを断っているので自分で作らなければならぬ。任務の報酬だけでも同年代に比べるとはるかに収入はいいが、仕送りのほかにも貯金をしているので、できるだけ個人的な出費は抑えておきたい。アカメはタイラが予想するに小国の国家予算ほどの財産を持っていそうだが、孤児院の食費や学校などに寄付しているので実際のことは不明だ。

どうしてあも他人に甘いかな。タイラは余計なお世話だとわかっていながら溜息を禁じえない。

慰霊碑の前で別れた彼の表情は、今までタイラが見てきた彼とは同一人物とは思えなかった。

孤独から生まれ、それこそまだ毛も生えていないような子供の時から戦場に生き、徹底された教育の中で人格を作られてきた彼が、人間らしい顔を見せたのだ。

もちろん、年下である自分に接する彼は、上司であり、兄であり、信頼も尊敬もできた。

ただ、あまりにも自分自身を蔑ろにしすぎていて、彼が自分にするようには、彼自身も大切にされるべきだと思っていた。しかし、その役割は自分にはできるものではない。

彼自身が本当に大切に思う相手をみつけ、できれば、その相手に同じように彼も思われなければ、意味がない。彼だって人間なのだから。

自分には母親がいて、無償の愛情を注がれてきた。ときどきそれを疎ましく思うこともあったが、自分の強さにもなりえた。重度のマザコンではないが、存在価値の一つだと思っている。

花屋の少女とアカメの関係がどれほどなのかは知らないが、昨夜の彼女を見ている限り、アカメに甘えているのは一目瞭然だった。

彼がこの世界でどれほど恐れられているのか知らないとはいえ、並大抵の女ではああはできない。

顔を斜めに横切る傷痕と眼帯という異様な組み合わせを踏まえてもアカメは女に好かれた。色町に行けば引く手数多、野外宿泊所でも数少ない女達が每晚入れ替わり立ち代り彼のテントへ通うほどだった。来る者受け流し去る者追わず、据え膳食わねど、どこ吹く風つれない素振りですえ惹かれると謳われる。そんな彼が自ら重い腰を上げたのだから、これほどの天変地異はない。できれば、彼女と穏やかな日々を送ってもらいたいがそうはいきそうもない。よせばいいのに部下が後腐れなく部隊から抜けられるように汚れ役を買って出た。上層部の誰もがアカメの性質をわかつていたので咎めるつもりはないようだったが、ジキが外部の民間団体と連絡を取ってしまったので、いくらアカメでも同胞に瀕死の重症（実際は回復力も考慮された負傷）を負わせたので、上も黙って見過ごすわけにはいかなかった。

露出度の高い黒髪の女を見かけて余計気が重くなった。素通りしようにも、彼女の険しい表情が気になって声をかけた。

「こーんにちはー」

社交辞令を声に貼り付けたまんまの挨拶にアゲハは露骨に眉をしかめた。

「なんや。アカメはんのストーカー坊ちゃんやない。あんたもアカメはんのケツ追っかけとんの？」

「あなたと一緒にしないでくれますか。俺は買い物途中です」

「あら、よう似合うとるで。専業主夫。旦那さん何時にお帰り？」

アゲハはタイラを見回して鼻で笑い飛ばした。やっぱり素通りすればよかったと後悔したが遅かった。

「何しているんですか、こんなところで」

さっきケツをどうこう言っていたのは置いといて、彼女の表情が気になって尋ねた。

「静かにしてや。あの腑抜け面、ほんま腹立つ。二人の世界やない
つちゅうに！」

アゲハが憎憎しげにいう視線の先に花屋のドアがあった。目を凝
らすと、ブラインド越しにアカメと件の少女が仲睦まじくなにか話
しているようだった。

「ヤキモチですか」

タイラが暢気な声で言うと、並の男なら縮み上がってしまいそ
うな鋭い眼光を向けられた。

「阿呆やな。人目も気にせずあんな呆けたことしよるあの男の詰め
の甘さに呆れとるんや」

アゲハは毒霧のような溜息をつき、再び店内に目をやる。

「なあんで男はんはああいう素人臭い小娘に弱いんやろか。ほんま
腹立つわあ」

「あの人は破瓜の儀式頼まれてものりくらりとかわすような人で
すよ。何人か俺に回ってきたことあります」

「坊ちゃん、育ちの良さそうな顔してえげつないこと言っなあ」

「ギャップ萌えでしょ？」

につこりと笑って見せても彼女の仏頂面は変わらない。

「阿呆。うちのギャップ萌えは逆や。あんさんみたいなえげつない
のは好かん」

「そうですか。それはよかった」

「なんやの？ からかいに来たんなら御礼に針つきの鞭でも堪能さ
せたりまひよか？」

「いやあ、先輩みたいに痛覚鍛えてないのでご遠慮します。アゲハ
さんが呪い殺しそうな顔しているから、標的が心配で声をかけたん
です」

「つくづく無駄口の多い坊ちゃんやな！ ええから去れ」

「先輩の邪魔するなら黙って去ることはできません。とりあえずど
こかでお茶でもしませんか。アゲハさんに奢るくらいなら余裕あり
ますよ」

「粹楼庵のお抹茶に栗鹿の子やつたら付き合つてやらんこともないよ」

「なら、それで手を打ちましょう」

「ちつ。可愛いなあ」

アゲハは腕を組みいかにも高飛車な素振りでタイラを眺めまわす。
「別にあなたに可愛いと思われなくても生まれたことを後悔したりしませんから、ご心配なく」

「誰もあんさんの心配なんかしらん。ええからあっち聞いてみい」
アゲハに腕を取られ、耳打ちされる。言われたとおり耳を澄ますと向いの八百屋と魚屋のおかみ同士が交わしている世間話が聞えてきた。

「メジロさん臨時休業ですって」

「昨夜遅くに会ったんだけど、まとまったお金が手に入ったのかなとか言ってたわよ」

「そっぴいや昨日若い男の子達が花配ってたものね。今朝せりにいくときチラッと見たんだけど、からっぽだったわよ」

「なんだっけ、あの若い女の子。あの子が金持ちの男を捕まえて連れてきたとか。うちの倅の小学校に二人できてたらしいのよ！」

「ああ、あの子？ あの地区の出身でしょ？ 国のお偉いさんとお知り合いになるのも簡単なんだろうねえ。人は見かけによらないって言うけど、ほんと、あんな子がね。純そうな顔して意外ねえ」

タイラは至近距離のままアゲハに目配せた。

「……あん人らだけやないよ。この界限皆似たような噂しよる」

「どうみたって彼女、処女でしょうに。んでもって先輩があの子に手を出すような甲斐性があるとも思えません」

タイラはアゲハから店内に視線を移す。

「アンタのえげつなさは世界を変えそうやな」

「世界よりも言い方変えましょうか。先輩は無理やり女の子を手籠めにするような無粋な男ではありません」

「そりゃ、あんさんがアカメはんの素性を知ってるから言えること

や。うちから言わせてもらえんなら、恋し相手を誹謗中傷の的にするようなボケの野暮天やで、アレ」

「きつついですね。否定はしませんが庇護はします。先輩は褥の手管は手練ですけど、恋愛はまったくの初心者なので周りが見えていないんですよ」

「それが庇護かいな。けなしとるようにしか聞えへんよ」

「じゃあ、なんていえばいいんですか。事実でしょう」

「あんたらの部隊ボケカス揃いやな。ええか。つまり庇護する暇あつたら、あのボケカスにそれとなくこのこと教えたり」

「覗き見た挙句人の噂話まで盗み聞きましたって、あなた先輩に言えますか？」

「諜報部員はこんなこと日常茶飯事やで。あんさんが言わんのやつたらうちが言うたる」

タイラの額におよそ女性とは思えない怪力でデコピンを打つと、ふんと、鼻を上げて花屋のドアを蹴破った。

蚊帳の内、強行突破

「建造物等損壊罪で訴えられますよ」

悲鳴を上げるマシロを背後に隠し、アカメは乱入者へ警告する。

飛び散るガラス片とひしゃげた木枠、不遜な表情の美女。

「ちよつともー、アゲハさあん。こんなことしたら上から何言われるか、わかってるんでしょー？」

アゲハの背後でタイラが頭の痛そうに額を押さえながら喚いた。

「喧し」

アゲハは一蹴すると、アカメに向き直る。

「堪忍してなあ。うちごつつう気い短いんよ。あんさん気づいてはるくせに知らん顔しはるから、ちよいと出張らせてもらいますわ」

「アゲハさんがこんな無粋なことするとは思っていませんでした」

一瞬、紅い唇が左右にゆっくり広がったかと思うと、視界が歪んで不安そうなタイラが見えた。

しまった。油断した。アカメは気で押し返したが、遅かった。

アゲハは既に背後のマシロに覆いかぶさって、アカメが先ほどようやく触れた唇を割り、啞内を蹂躪している。

「ちよつとなにしてんですか！？」

タイラの悲鳴のような声。

アゲハの得意な幻術にまんまと嵌められた。その隙にマシロを奪われてしまったのだ。

「……んう、んん……はあん……」

マシロの唇から悩ましげな声が漏れ、打ち消したはずの幻術に未だかかっているかのようにアカメは立ち尽くしている。

「ええ……？ お嬢ちゃん、お姉様っていうて……な？」

「お……お姉様あ……！ あ……ん……っ」

唇をすり合わせるように重ね、水音を立てる。

「……そう……そうして舌を絡めたってな……こっや……」

「んんんっ……」

ちゅぷ、と粘質な音を立てて唇が離れた。

「それしたつたらアカメはん悦ぶわぁ……。ええよ。お嬢ちゃん、吸い付くの上手やなぁ……」

「……お姉様……。あ、んん……」

頬を紅潮させて熱っぽい涙目になったマシロが甘ったるい声を出してアゲハに魅入っている。

アカメはマシロからアゲハを引きはなすように押しのけ、珍しく眼光を強めた。アゲハはコロコロ笑って身をよじる。

「うち、褥の手練手管の教育係も任されてんねやで。心配しいな」
「タイラ、解毒剤持つてない？」

力が抜けたマシロの肩を両手で支えながら、唇に指を差し込み、舌を撫でて、その指を舐めて味を見る。指を挿入した時に唾液が光るほど舐られた。催淫効果だけではなく幻術にもかかってしまっているようだ。目は虚ろでそこがなんとも艶っぽいのが周りが見えていないようでアカメの身体を探るように撫でてくる。

「結構強い催淫剤？ なにこれ新しいの？」

「手持ちのヤツで効きますかね？ 中和剤くらいしかないと思いますよ。アゲハさんの体内で生成される劇薬に対する解毒剤は作れていないですから」

「失礼やな。劇薬やない、フェロモンや」

「まったく……。おれたちと違ってこの子には耐毒性ないんですよ？ 劇薬より性質たちが悪い」

「心配せんでもええよ。半日で未通女のまんま悦ぶ身体にこさえてあげますさかい」

「結構です。そっいうのは自分でやりたいんですよ」

「先輩、本音抑えて下さい」

「あつははは！ ええやん、たつぷり可愛がつてあげたら？ 汗やらなんやらでそのうち出ていきますさかい。なぁ？」

妖艶な流し目を受け流し、アカメは舌打ちをする。

「タイラ、利尿効果のある薬持つてる？ あと即効性の睡眠剤」

「あ。それならあります」

「色気のない対処やなあ。ほんまものの野暮天やわ」

懐からピルケースと、買い物袋からミネラルウォーターを取り出してアカメに手渡す。

「タイラがいて助かった。おれはこういうの持ち歩かないから」

「油断大敵やで。アカメはん。敵があんさんだけ狙うてくるとは限りまへんからなあ」

「そりやどーも。勉強になりました」

まったく心のこもっていない声でアゲハを睨むと、マシロがもぞもぞと身体を揺らした。

「……アカメ、さん……」

「少しの間我慢してくださいね」

腕の中で崩れるように身を任せてくるマシロはこの上なく愛しいが、不本意だ。片手で支えながら、粉薬と水を口に含んで口づける。

「ん……」

「わーお」

タイラは指の間を全開にして顔を隠す振りだけして囃した。

「っていつか、アゲハさん何しに来たんですか。先輩に忠告がどうこうおっしゃっていませんでした？」

「うちかてちよっとくらい楽しんだってええやん。なんでわざわざこのお人に親切だけせなあかんの」

「なんの話か全く見えないんだけど」

利尿剤はまだ効き目がないが、睡眠剤が効いているのか、マシロの意識は朦朧とし始めた。

アカメは作業台の上に彼女を横たわらせ、二人に向き直る。

「さつき、商店街の人たちが彼女が先輩を誑し込んで報酬を得てるって噂してるのを耳にしまして。聞くつもりはなかったんですが、アゲハさんが聞けっていうものですから聞いちゃったんですね。それで、あまりおおっぴらに行動すると彼女の評判に関わるんじゃない

ないかと心配しているわけです。アゲ八さんが」

「あんた傍観者の立ち位置変えんつもりやな？　うちを止めれんかった時点で共犯やで」

「そんな。あなたアゲ八っていうかマムシなんじゃないんですか」

「うちのとおておきの毒で三途の川泳がしたるか？」

「そんなこといいから、そんな噂がたつてるの？」

「そうみたいです」

アカメは眉をひそめ、なにか考えるように顎をつまんだ。

「ある意味間違っではないないけど、ちよつと誤解されてるよね。おれたちちゃんと愛し合ってるんだから」

「すみません。先輩。それはさすがに聞いてて恥ずかしいです」

「事実だから他に言い様がない。あーあ。マシロさんおれと婚姻してくれないかな。式挙げたらそんな噂なくなりそうじゃない？」

「いや、余計決定的に悪く言われそうですけど、どうなんですかね。彼女一月も経たないで未亡人になることは決定しているようなものでしょ」

「でも、遺族手当てとかおれの遺産の半分寄付に回るけど半分は彼女に与えられるじゃない」

「金目当てって言われんの目に見えてんで」

三人は黙り込んで、一斉に眠ってしまったマシロを見た。

「他人のやつかみほど困ったもんはあらへんなあ」

「今さら降り出しながら戻らないよおれは」

「じゃあ開き直るしかないんじゃないですか？　彼女が耐えられるかが問題ですけど。先輩、勝算は？」

「おれ一人なら不戦勝くらいの確信あるけど、彼女の気持ちばかりはなんとも」

「愛し合ってるって言いきつたの先輩じゃなかったですか？」

「ここの範囲では芽生えたよ？　でもまだ彼女の気持ち新芽よ？　寒さには弱いかも知れないじゃない」

アカメは手で自分とマシロの間にぐるぐる円を書きながらタイラ

に訴える。

「とりあえず、場所移動せえへん？ 坊ちゃんが栗鹿子とお抹茶ご馳走してくれはるんやて」

「邪魔しなかつたら手打ちましようって言いましたよね？」

「ええやん、ドケチ。お嬢ちゃんはうちが運んだるさかい、皆で行こか。楽しませてもらうた礼にお嬢ちゃんに飴蜜でもご馳走したろ」「もうホントに何しにきたの？ タイラまで。邪魔しにきたとは思えないんだけど」

「違いますよ、誤解です」

「恋に障害はつきもんやで。ほな行こ行こ」

ぱちんとアゲハが指を鳴らすと、マシロがゆらりと上体を起こした。

「えええっ！？」

タイラが驚愕する。アカメは溜息を吐いた。

「この人ね、アゲハでもマムシでもなくて、別名女王蜂だからタイラも気をつけなよ。フェロモンで操り人形にされるからね」

「それ早く言ってくださいよ！ 俺フィールド内じゃないですか！」

「大丈夫。おれたち隊員には耐性あるはずだから。アゲハさん。彼女に妙なことをさせたら、おれもそれなりのことをさせてもらいますよ」

「アカメはんの破魔眼拝ませてもらえんのかいな。楽しみやわあ、なあ？ お嬢ちゃん」

「はい。お姉様」

マシロがアゲハの腕にべったり絡み付き、ニコニコ笑っている。

アカメは不機嫌そうに固く口を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6104y/>

烏と梔子。

2011年12月5日14時55分発行